平成25年度　第16回

いきいき市民のつどい

記　録　集

全体テーマ

いまを活きる生涯学習

～気づいたときがスタートライン～

『生涯学習の振興ための施策の推進体制等の整備に関する法律』が平成2年に公布されてから23年が経ちました。生涯学習という言葉もなじみ深いものになってきたかと思います。そこで今、生涯学習が生活の中でどう息づいているかを改めて考えてみましょう。

平成26年１月25日（土）

主 催

岸和田市生涯学習推進本部・岸和田市・岸和田市教育委員会

目　次

平成 25 年度 第 16 回いきいき市民のつどい

いまを活きる生涯学習

～気づいたときがスタートライン～

第 1 部　基調講演

開会のことば（生涯学習推進本部委員長　松 端（まつのはな） 孝元（たかはる））・・・・・・1

主催者あいさつ（市長 信貴（しぎ） 芳則（よしのり））・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

● 基調講演「生きていく力、つながっていく心」

兵庫県立嬉野台（うれしのだい）生涯教育センター　所長　多田（ただ） 昌史（まさし）　氏

・・・・・・・・・・3

第 2 部　パネルディスカッション

《パネリスト》

西山（にしやま） 光子（みつこ）　氏（岸和田市立図書館「詩の教室」所属、詩人）

『私を育ててくれた郷土の道』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

上月（こうづき） 正洋（まさひろ）　氏（障害者学級しゃぼんだま　代表）

『学びから生きる力を』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

桜井（さくらい） 一宇（かずたか）　氏（NPO 法人ファザーリング・ジャパン関西　理事）

『子育てから地域へ』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

ディスカッション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40

資 料 編

・アンケート集計結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

・開催要項　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62

第１部

―基調講演等―

開会のことば

岸和田市生涯学習推進本部　松 端（まつのはな） 孝元（たかはる） 委員長

本日は、非常に暖かい良い日和に恵まれ、一日お天気の崩れはないということですので、最後までご参加よろしくお願いいたします。

この「いきいき市民のつどい」は、今回で第 16 回目をむかえることとなります。今までは活動発表の後、分散会においてお話合いをしていただきましたが、本日はパネルディスカッション形式で、基調講演の後それぞれのパネリストの方々に少し発表をしていただき、議論をしていただくという形になっております。

基調講演の講師としまして、兵庫県立嬉野台生涯教育センター 多田昌史 所長をお迎えしております。

「生涯学習」と嬉野台の「生涯教育」とはどういうものなのかと思われるかと思います。お手元のパンフレットにありますように、平成２年に「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」が公布され、その時に「生涯学習」ということになりました。

「生涯教育」といいますと、学校教育のように学校という施設があり先生と生徒がいる。先生がお休みした場合、生徒は自習をするわけですが、「生涯教育」では“自分で”学習するということです。「生涯学習」というのは、一生をかけて自分の成長を確かめていく活動だと思っております。法律は、そういう個人の生涯学習活動を支援していくということになってございます。

本日は、そういうことも多田所長よりお話いただけるかと思いますが、みなさんそれぞれご自分の学習を深めていただく一つのきっかけにしていただければと思います。

簡単ではございますが開会のご挨拶とさせていただきます。本日は、どうか最後までよろしくお願いいたします。

主催者あいさつ

岸和田市長　信貴（しぎ）　芳則（よしのり）

皆様、こんにちは。「第 16 回いきいき市民のつどい」を開催しましたところ、皆様方にはご多用中にもかかわらず、多数ご出席を頂きました。厚く御礼申し上げます。

「市民のつどい」は平成 10 年度に「年輪のつどい」としてはじまり、その時に生涯学習推進本部として立ち上げられ、早 16 回の歴史がございます。

その時々のテーマに応じた講演、そしてパネリストをお迎えして議論をたたかわせる、本当に有意義な集まりでございます。

本市は三世代が支えあうまちづくりをテーマに掲げて、いろいろな施策を展開していく予定でございます。そのような時期に「今を活きる生涯学習～気づいたときがスタートライン～」、本当に時宜を得た講座であると私自身も大変嬉しく感じております。

子どもからお年寄りまで生きがいのもてる暮らしができる。また今日は、子育てにおいても、男親の子育てにテーマをおいたパネリストの方のお話を聞くことができます。

市民が一緒になって、この地域の魅力・岸和田の魅力を引き出していく、生きがいを感じていく。そのためにも、この「市民のつどい」を実施されることを心から念じておるところでございます。

皆様方には、このテーマが有意義なものになることを、心からお祈り申し上げます。

終わりにあたりまして、このつどいを実施いただきました生涯学習本部の委員の皆様方に心から御礼を申し上げながら、本日ご参加の皆様方のご健勝ご多幸を心からお祈り申し上げまして、主催者を代表しましてのごあいさつとさせていただきます。

本日は、多数ご出席いただきまして、ありがとうございました。

基調講演　「生きていく力　つながっていく心」

兵庫県立嬉野台生涯教育センター
所長　多田　昌史　氏

【プロフィール】
1978 年　京都大学法学部卒業
同　　年　兵庫県庁入庁
高齢者福祉、税務、民間シンクタンク、明石海峡大橋完成記念事業、阪神・淡路大震災復興事業（人と防災未来センター）、国際交流、多文化共生などを担当
2012 年　現職

皆さんこんにちは。兵庫県立嬉野台生涯教育センター所長の多田と申します。聞きなれない名称で、いったいどこにあるのかな、どこから来た人なのかなと疑問に思われる方もいらっしゃると思いますので、まず初めに私の職場をご紹介させていただきます。

一言で言いますと、生涯学習を推進している施設の現場責任者というのが私の役割でございます。場所ですが兵庫県の加東市で、市町村合併前は社町(やしろちょう）といい、そこに昭和 54 年（1979 年）にオープンしました。もう 35 年になります。これ(下写真)は空から撮った写真で、面積がざっと甲子園球場が８個入るくらいの広大な施設です。ほとんどが森や林ですが、グランドや体育館・講堂があり、青少年から高齢者までが集う、生涯学習の場です。

昨年度の利用者は約 20 万人で、主な施設として、屋内施設や野外施設、宿泊施設もあります。

兵庫県にありますが、２割近くは県外からの利用者で、大阪からお越しになっている方々もいらっしゃいます。

運営方針としてスローガンに掲げておりますのは、“学びと実践の一体化”ということです。座学といいますか、教室で講師の話を聞いて、学べばそれで終わりというのではなく、学んだことを次の何かに生かしていこうという実践の部分も一緒に取り組んでいくことを、スローガンにしています。

所在地　兵庫県加東市下久米 1227－18
開　所　昭和 54 年７月
面　積　４０４，６２４．０５㎡
（甲子園球場８個分）
年間利用者数　２１２，３９９人
（平成２４年度実績）

主な施設

【屋内施設】研修室・陶芸室・工作室・体育館・講堂(500 人収容)・
レストラン(一般用)・青少年食堂(団体用、定員 272 人)

【屋外施設】多目的グランド・芝生広場・テニスコート・キャンプ場・冒険の小川

【宿泊施設】青少年宿泊棟（定員 48 名×10 棟）・成人宿泊棟（定員 68 名）

《 運営方針：学びと実践の一体化 》

① 自己を高め、自分らしく生きるための学習
② 社会の変化に対応するための学習
③ いきいきとした人生を送るための学習

どういう活動をしているか、言葉で説明するより写真を見ていただくほうが良いでしょう。

写真で見る活動状況　野外活動・自然学校の受入れ・支援

キャンプ用のテント張り

アーチェリーをする子どもたち

小川で魚とり

カヌー体験

うれしのユースセミナー（夏・冬・春）

ユースセミナーといって、春、夏、冬休み中に小学生・中学生を対象とした野外活動事業をしています。皆さん、とても楽しく活動しています。

手作りのジャングルジム

竹細工　作成中

手作りの筏

キャンプファイヤー

ひょうご冒険教育（ＨＡＰ）

センターの特徴的な事業が「ひょうご冒険教育（ＨＡＰ）」です。Ｈ＝兵庫・Ａ＝ADVENTURE（アドベンチャー）・Ｐ＝PROJECT（プロジェクト）、で「ハップ」と呼んでいます。

これは、大人でも子どもでも、少し高いところに登って命綱を持ちながら移動しているものです。写真には写っていませんが、下には命綱を支える仲間がたくさんいます。これは遊びではなく、確立された冒険教育の一つなのですが、仲間との和を大切にしてお互いに助け合いながら一つのことをやっていくということがプログラムの基本です。

“一歩踏み出す勇気”を、養うという効果もあります。何かをやろうと思えば、一人だけではなく仲間からの助けも必要です。お互い助け合いながら、一歩一歩プログラムをこなしていく事業です。

高齢者大学（うれしの学園生涯大学）

高齢者大学も運営しております。講座の受講だけでなく、地元の小学生と一緒に６月に田植えをして、10 月に実った稲を刈り取り、２月には採ったお米でお寿司を作るという多世代交流もしています。

また、学園祭での活動発表や、地元の社（やしろ）高等学校生活科学科の生徒たちと一緒になって食と栄養を学びながら調理実習をしています。顔を見ていただければわかるように、皆さん笑顔で楽しそうですね。

高齢者大学の授業風景

地元の小学生と一緒に田植え

うれしの学園生涯大学　学園祭

地元の高等学校の生活学科の調理実習に参加

うれしの春のフェスティバル

毎年５月のゴールデンウィークの期間中の４日には、３千人の方々が集まる、フェスティバルも開催しております。

多世代ふれあい交流

高齢者や家族と一緒に、「親子の陶芸教室」や「シャッターアート」などの多世代交流も行っています。

親子の陶芸教室

シャッターアート

ひょうご・ロシア　ハバロフスク少年少女交流

兵庫県とロシア極東に位置するハバロフスク地方とは姉妹都市です。ロシアと兵庫県の子ども達が、兵庫県の県鳥・コウノトリが結ぶ縁で、隔年でお互い行ったり来たりの国際交流をしています。

これらの写真は、昨年８月に、ロシアの子ども達が嬉野台へやって来たときの写真です。

以上、このような事業をやっているのですが、子どもから高齢者まで、非常に楽しく生涯学習を実践しているというイメージを、掴んでいただけたらと思っています。

～「いのち」と「こころ」に関わる体験～

今までは紹介でございましたが、これからが本日のメインテーマに関わるお話です。

今回いただいたテーマが「生きていく力　つながっていく心」で、生涯学習の観点から語るとき、どうお話しようかなと思ったのですが、普段、一般の方は「命や心」について考える機会というものは、あまりないと思います。

平凡に生活しておりますと、それは日々の暮らしであって、何か真剣に「命や心」について考えることはないのですが、そうは言っても必ず一生のうち何度かはそういったことを考えさせられる時期ってあります。例えば、悲惨な事件や事故を経験する、あるいは自分の大切な人を亡くすこともありますし、災害等に遭って辛い思いをして「死んでしまいたい」とか「生きる力が湧いてこない」といったことが、人生の中では少なからずあると思います。

私の場合は、経歴にもありますように阪神・淡路大震災ですが、やはりこれが大きな事件となって顕れています。

ご存知のとおり、今から 19 年前の 1995 年 1 月 17 日に発生しました。ちょうど先週 1 月 17 日は金曜日でしたが、私も休暇を取り、追悼式典に参加してきました。もうあれから 19 年経つのかなと感慨深いものがあります。やはりあのときに「命や心」に関する思いみたいなものを、自分も他の人たちと共有したのだなと思った次第でございます。

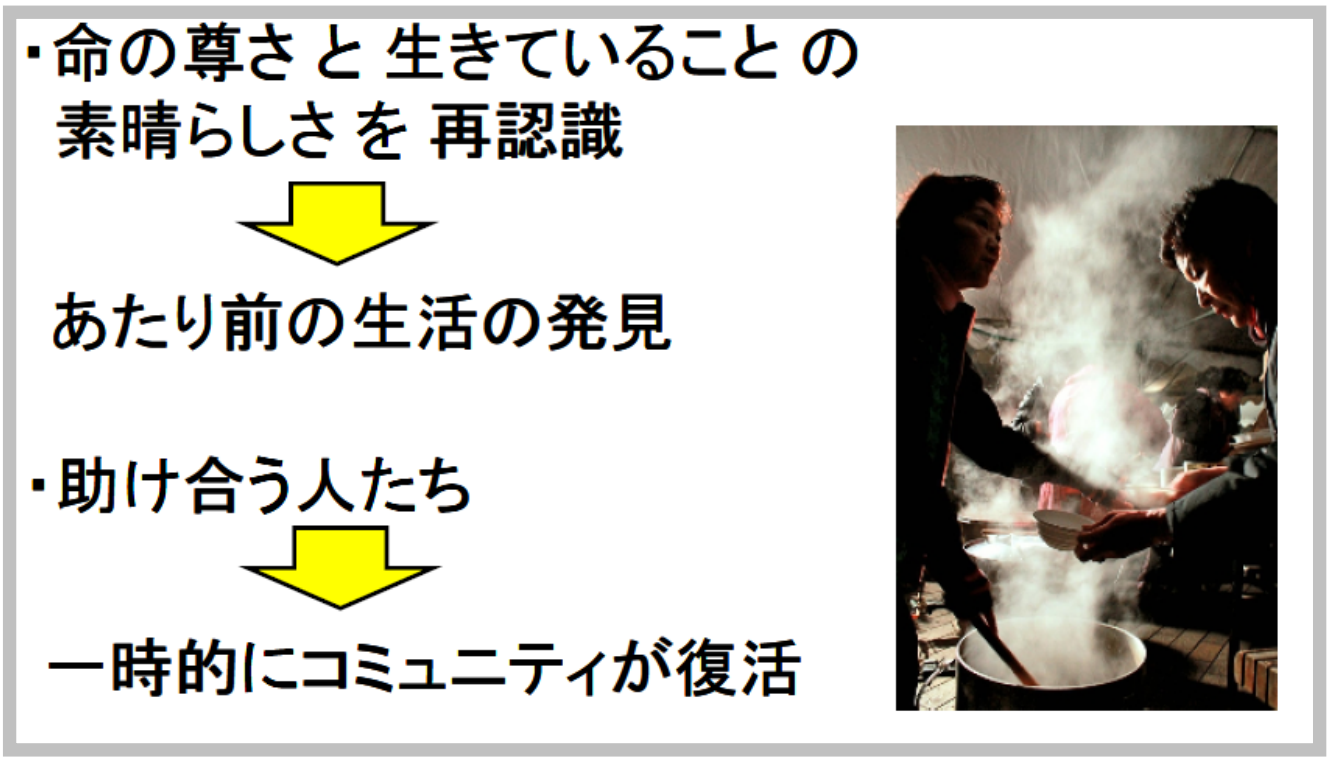
阪神・淡路大震災のことは、皆さんもいろいろな報道などでご存知かと思います。

こうした震災を経験すると、命の尊さや生きていることの素晴らしさを再認識させられます。当たり前のことなのですが、普段なかなか気づかないことなのですね。これを阪神・淡路大震災が再認識をさせてくれました。

東日本大震災でも、どこの災害でも同じなのですが、震災の後は必ず助け合う人が出てきて、一時的にその地域でコミュニティが復活します。

なぜこのようなことを言うかといいますと、都会やマンションに住んでいる方々に多いのですが、これまで隣に住んでいる方とほとんど口をきいたこともない、これは特に兵庫県でも神戸市などではそういったケースがあったらしいのですが、普段日常的におつきあいしていなかった人たちが、こういった震災をきっかけに知り合うことになったり、あるいは普段あまり家の仕事を手伝っていない小さな子ども達も水をバケツに汲んで、地震でエレベーターが止まってしまったので、階段を使って部屋まで運んだりと、家族の中でもあるいは隣近所でも、一時的ではありますがちょっと嬉しいコミュニティが復活しました。

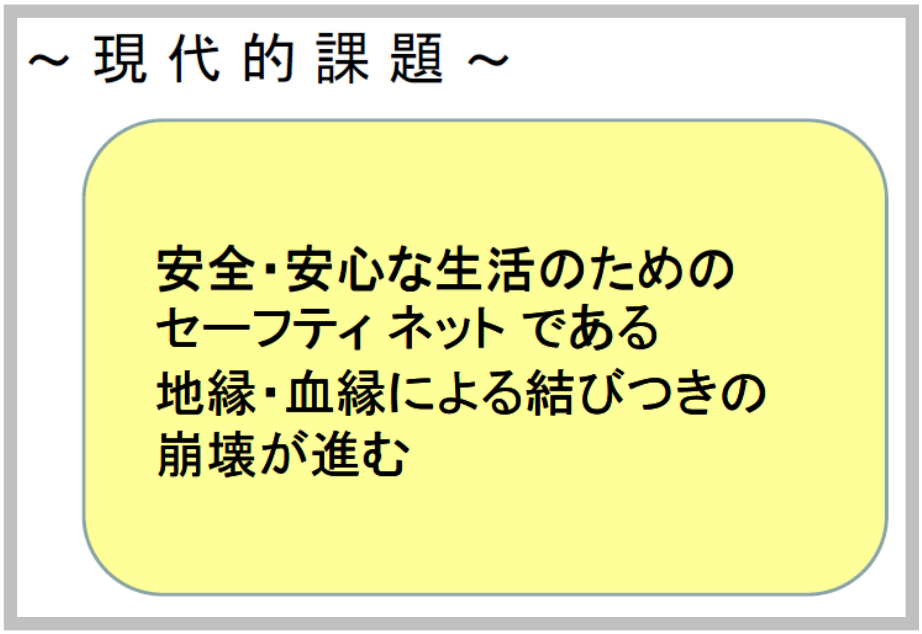
さらに一時的に小学校等いろいろなところに避難するのですが、その避難所の中は、やはりその時点では、着の身着のままほとんど何も持たずに、逃げ出してきた人たちばかりですから、避難所の中はある意味完全な平等社会のようなものが出来てきます。



最初は、生きていて良かったという気持ちの高揚感もあるのですが、日が経つにつれ非常に残酷なことですが、例えば資産がある人は、早い段階でその避難所を出て行って、蓄えているものを利用してまた新しい生活に入る。でもそうでない人たちは、なかなかそこから抜け出せない。高齢の方、仕事をしていない方は、家が無くなってしまってこれからどうやって生きていけばいいのか途方に暮れてしまう。若い方は、二重ローンになってもいいからもう一度お金を借りて家を建てようとされる方もいらっしゃいます。しかしそうでない人は非常に辛い立場になる。

それから、小さな子どもたちは地震の揺れが大きなものでしたので、心の傷となりトラウマになっている。医学用語では PTSD（心的外傷後ストレス傷害）といいますが、人間の心の中がもうズタズタになっていて、将来に希望を見出せないだとか、生きていても価値がないだとか、中には自分で自分の命を絶ってしまう人もいたり、そういう場面がたくさんありました。

ですから、行政の立場としても、被災者の方々を応援されている方も、何とか「生きていく力」を身に付けてほしいと願っているのですが、こういった事件が起きる時でないと、「生きる力」など考えるきっかけがないというのは、非常に不幸なことです。ただ実際は、やはりこのような大きな震災を契機として、命や心のことについて考えるきっかけができたということです。私にとっては、やはり震災が大きなきっかけになりました。



そこで少し一般化して考えてみますと、「現代的課題」と書きましたが、安全・安心な生活のためのセーフティネットである地縁や血縁による結びつきが崩壊している。これはもう皆さんも日常的に感じられていることかと思います。核家族化が進むとか、都市化が進むとか、日本の家族の意識なども大きく変わってきています。それまでは地域の人たち、あるいは親戚同士や家族の中で助け合ってやってきたことが、だんだん維持できなくなってきている状態にあります。

そのために新しいネットワークを構築する必要があるのです。これは何も掛け声だとか、呼びかけの声だけで、すぐにできるものではないと思います。

私が生涯学習に携わっていていつも思いますのは、何か新しいネットワークを構築しようと思えば、ふるさとを意識する瞬間や、様々な体験をする機会があることが必要で、たとえば岸和田であれば、ここに住んでいらっしゃる方々が、自分はこの地域が好きで住んでいる、もちろん転入されてこられた方もいれば、何十年も住んでる方もいるわけですが、この地域が好きでこの地域に何かふるさとの意識をもっている、そうした土地に対する愛着のようなものがあって初めて誰かとの結びつきができるという素地ができるのではないかと思います。

それから、様々な体験といいますのは、一過性の経験ではなくて、その経験が次の自分の新しいアクションを起こすときの基礎になっており、量的に増え、質的にも充実するような体験をいいます。地域でそうした体験をすることで、もう一度仲間作りができるとい

う、ベースにはそうしたものがないと新しいネットワークを構築して、お互い助け合いましょうと声だけを掛けても、全く実行性がありません。

だから、ベースにはふるさとを意識したり、その地域でさまざまな体験をしたということが必要で、そうしたことがあれば、またここを出て行っても岸和田のことを思い出すというような考えが流布していかないと、ネットワークは構築できないと思っています。

それに対して生涯学習が何かの役割を果たすとするならば、人と人を結びつける力があるということです。ラジオ講座を聴いたり、テレビで何かを勉強するという１対１での学習の仕方もあるのですが、我々が考えている生涯学習は、一つの場に志を同じくするものが集まって講師の話を聞くということもあるし、自分達が同じ仲間同士で教えあったり、学びあったりする関係でもって、人と人とが結びついていく。そういうような力が生涯学習にはあります。また、それは単に学ぶだけではなくて、その成果を活かすこともできます。

人間というのは、何か新しいことを学べば、気持ちがウズウズしてきてそれを何かのために使いたい、人の役に立ちたいという気持ちが出てきます。生涯学習がそのきっかけになっているのだなということを、私も現場でいろいろな方を見ていていつも思っています。

～ 生涯学習の役割 ～

・人と人を結びつける力

・学んだ成果を活かす

参考までに、体験活動について、国立青少年教育振興機構が 22 年度に調査して 23 年度にレポートとして発表した結果をお示しします。ここには、私がお話したことに少し関連した部分があったので、３つ位論点として拾ったのですが、「体験を多く行なった青少年ほど他者への思いやりや積極性などの自立的行動習慣が身についており」ということ。

それから、「ボランティア活動などの子どもの頃の体験が多い保護者ほど、人間関係能力、文化的作法、教養などの資質・能力が高い」ということ。また「子どもの頃に多くの体験を行なってきた保護者ほど、その子どもも体験を多く行なう傾向にあり」ますというような結果が出ております。

簡単にまとめますと、「子どもの頃の体験は豊かな人生の基盤」にもなるし、「子どもは親の背中を見て育つ」もの。「三代続けば江戸っ子」というのは少し象徴的な言葉ですが、三代続けて体験を行なっていけば、いわゆる体験活動というものは自然と身につきますよということを言っているのですが、そういう意味では非常に良い効果を持っています。

青少年の体験活動と自立 （1）

国立青少年教育振興機構
「青少年の体験活動と自立に関する実勢調査」
（平成22年度調査）

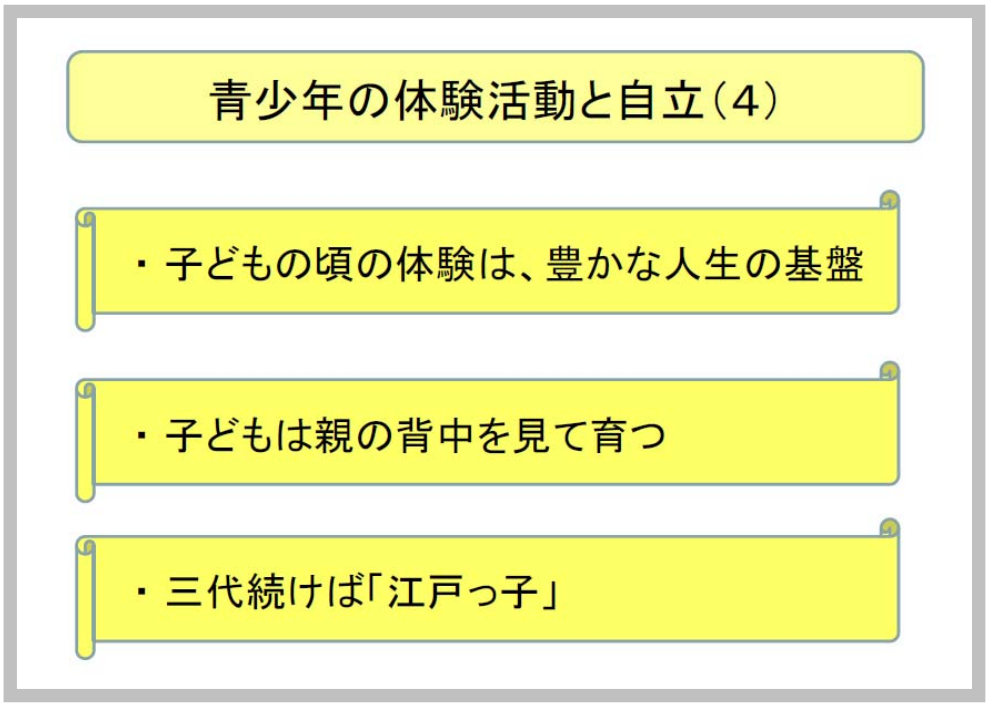
① 体験を多く行っている青少年ほど他者への思いやりや積極性などの自立的行動習慣が身についており、自己肯定感も高い傾向。

青少年の体験活動と自立 （2）

② 地域活動やボランティア活動などの子どもの頃の体験が多い保護者ほど、人間関係能力、文化的作法、教養などの資質・能力が高い。

青少年の体験活動と自立 （3）

③ 子どもの頃に多くの体験を行ってきた保護者ほど、その子どもも体験を多く行う傾向にあり、また自己肯定感の高い保護者ほど、その子どもも自己肯定感が高い傾向。

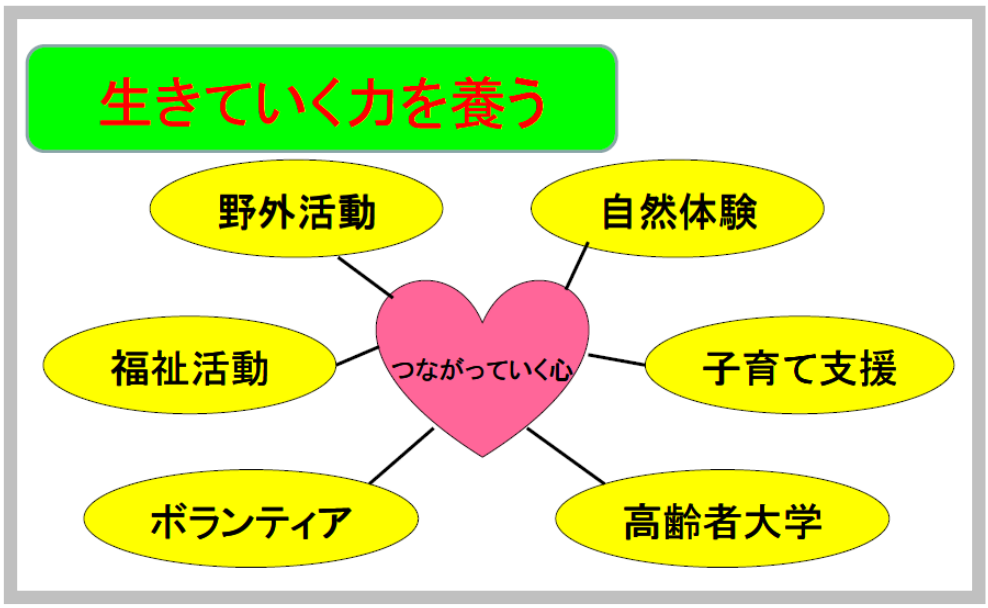


「生きていく力」を養う上では、「生涯学習」とも絡んでいますが、この野外活動や子育て支援、高齢者大学といろいろとここに書いてあるだけではなく、生涯学習のテーマは他にもたくさんあるのです。

そういったものに皆さんが参加されて仲間をつくり、それによって心がつながっていくという、本当の意味でのつながりができると思います。

東日本大震災のあと、「絆」という言葉がよく出てきました。「絆」という言葉は非常に聞こえは良いのですが、本当に「絆」というのはどのようなものかということを真剣に考えたとき、やはり人と人とが個人レベルでつながっていかないと、「絆」というのは、単にスローガンで終わってしまうのではないかと思います。

ですので、こういった生涯学習に参加することによって、生きていく力を養っていくことができるということが言えるかと思っております。



今日は皆様方には生涯学習をお勧めしたいということで、私のほうからの提案なのですが、生涯学習というのは読んで字のごとく、一生涯続く学びの営みであって、いつでもどこでもできるものです。

これは教育基本法という法律にもきちんと書いてありまして、こういうことが生涯学習であって、自治体はそれが推進できるように、環境整備を図らなければならないとあります。

岸和田市も公民館等を中心にして、たくさんの講座等をご用意されていますので、どんどんご参加される機会が増えていけば良いかなと思っております。

生涯学習であれば、当然何かを学ぶわけでありますから、知識や技術が向上します。そして一緒に学んだ仲間とは、きっとつながっていける。それは同じ時代の同世代の人たちや、同じ時代に勉強している人たちもそうですが、世代を超えたり、あるいは自分が将来亡くなってもそれが自分の子どもたちや孫につながっていくという効果を持っております。

生涯学習というのは、まさに今皆さん方に取り組んでいただきたいという、とても大切な営みだと思っております。ですから一言で言いますと「今からでも遅くはない」。今日のテーマであります「気付いたときがスタートライン」です。誰か仲間をつくりたいとか、あるいは何か社会のために自分も貢献したいと思っても、すぐに何かができるものではありません。ですから、生涯学習の様々な活動にまず参加して仲間をつくり、そこから社会に対してそれを還元していく。そういうような行動を皆さんがとっていただけたら、これから非常に有意義な人生が送れるのではないかと思っています。

最後に、「学んだら感謝の気持ちを地域に帰す」と書きました。昨年の流行語大賞に「倍返し」というのがありましたが、なにも復讐をするためだけの倍返しではなく、感謝の気持ち、良いことを倍にして返していただければ、もっと良いのではないかと思っております。

～ 生涯学習のススメⅠ ～

- 一生涯続く学びの営み
- いつでも、どこでも
- 自治体は環境整備を

～ 生涯学習のススメ Ⅱ ～

- 何かを学び
  （知識・技術の向上）
- 誰かとつながっている
  （同時代の、世代を超えた）

～まとめ～

- 今からでも遅くはない
- 教える、学ぶ関係
- 学んだら、感謝の気持ちを地域に返す

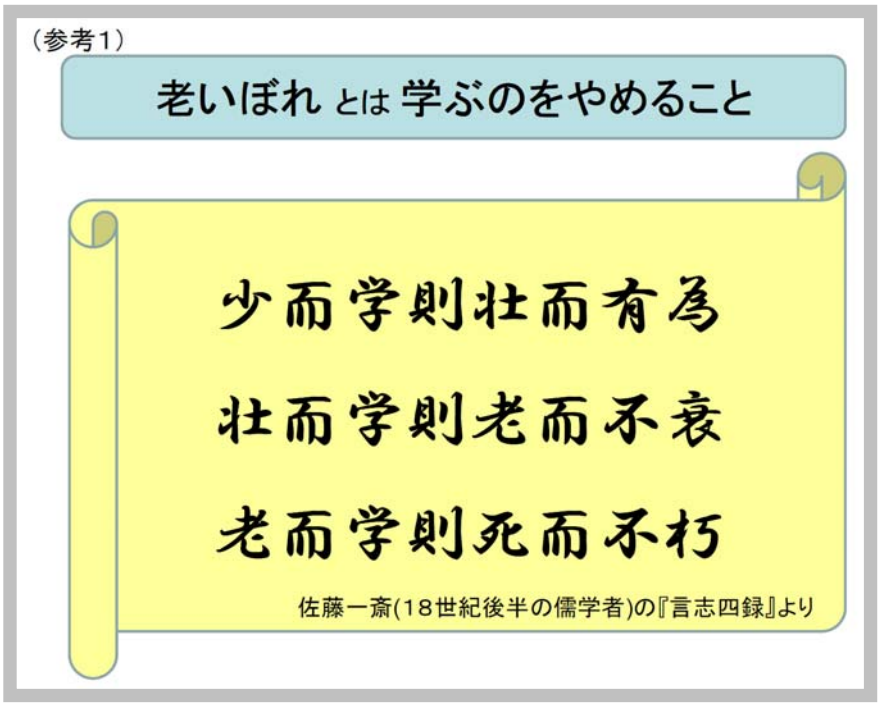
資料の中には入っていないのですが、「老いぼれとは、学ぶのをやめること」と唱えた方がいらっしゃいます。これは非常に良い言葉だなと思っております。

また、佐藤一斎(さとう いっさい)という 18 世紀後半に生まれて、19 世紀半ばまで生きた江戸時代の儒学者がいます。一斎の「言志四録」（げんししろく）という四つの本があり、その中に「若くして学べば、即ち壮して成すあり」という言葉があります。

これは、若いときに勉強すれば壮年つまり大人になってから、非常に世の中の役に立つことができるということを言っています。

次に「壮して学べば、即ち老いて衰えず」とあります。これは大人になってから学べば、年老いてからもそれは衰えませんよということです。

最後に「老いて学べば、即ち死して朽ちず」。歳を取ってからずっと勉強していけば死んでもそれは朽ちないということを、この佐藤一斎という方が言っておられたのですが、生涯学習のテーマみたいなものを、きちんと昔の方が言ってくださっているのかなと少しこの言葉に感心した次第でございます。



今日、私は兵庫県から来ましたので、どこかで岸和田市とのつながりがないのかなといろいろ調べてみましたら２つほどありました。

嬉野台生涯教育センターが所在する加東市の隣に篠山市があるのですが、そこの丹波篠山の藩主の松平康重さんは 1619 年に岸和田の藩主にもなられております。

あと一つ、有名なのが、「鉄人 28 号」です。皆さんご存知でしょうか。一定の年齢以上の方は、子どもの頃に漫画で読んだことがあると思うのですが、これを阪神・淡路大震災の復興のシンボルにしたいということで、地元有志の方々が一生懸命お金を集めて「鉄人 28 号」の原寸大モニュメントを作りました。その制作をお願いして作ってもらったのが、岸和田の北海製作所というところです。

こんなところに岸和田市と兵庫県とつながりがあったのかなと意外に思ったのですが、「鉄人 28 号」は非常にすばらしモニュメントですから、神戸に来る機会がありましたら、ＪＲ新長田駅前にありますので、ぜひご覧になっていただきたいと思います。

いただいた時間が 30 分ですので、途中で端折ったりしましたけれども、この後のパネルディスカッションの中でも、生涯学習を皆さん方にお勧めをしたいということを、いろんな角度からお話をしていきたいと思います。とりあえずは時間がまいりましたので、これにて私の方の基調講演を終わらせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。

（参考）

兵庫県と岸和田市のつながり

松平　康重（やすしげ）

丹波篠山藩主
（加東市のお隣 篠山市の殿様）
↓
1619（元和元）年
岸和田藩主

神戸市長田区
鉄人28号モニュメント

製作：岸和田市の
北海製作所

第２部

ーパネルディスカッションー

コーディネーター

嬉野台生涯教育センター　所長　多田　昌史　氏

パネリスト

西山　光子　氏　（岸和田市立図書館「詩の教室」所属、詩人）

「 私を育ててくれた郷土の道 」

幼稚園・小学校の教諭を経て、小学校長を最後に退職。

退職後は、岸和田市立図書館主催の「詩の教室」で活動。また市立公民館の「自主学習グループ若葉」の読書会グループや混声合唱グループにも参加。

ことばと表現を大切にし、様々な生涯学習を実践している。

また、自身の学びや楽しみにとどまらず、地域では町内活動として「ふれあい」のボランティアや、女性有志で立ち上げた、町内の人々の憩いの場である「喫茶たんぽぽ」というボランティア喫茶でウェートレスをしている。

「公的な人間」としての立場を終え、全くの「ひとりの人間」として学ぶ喜びを得、現在は「地域の中での人」としても活動の場を広げている。

只今、ご紹介いただきました西山でございます。拝見しましたところおそらく私が最年長であろうかと思います。先ほどの講師の方のすばらしいご講演の後、そして今日ご出席の皆様方のそれぞれの立場でのご活躍のすばらしさをよく存じておりまして、それを差し置いて一市民である私にこういう役目が回ってきたこと自体、とても恥ずかしいのですけれど、しばらくお耳をけがしたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

限られた時間ですのでレジメに沿ってお話しいたします。

岸和田に生まれて

私は、1934 年岸和田市沼町で生まれました。それから嫁ぐまで別所町で育ちました。以後５年は和歌山市に住みまして、それからまた再びこの地に戻ってまいりました。それからずっとここへ居着いております。岸和田が大好き、お祭も大好き。

古い時代からたくさんの歴史を抱えたこの地で、生まれ育ち学ばせていただいている。まずこのことに感謝申し上げたいと思います。私の人生の全ては、岸和田からでございます。

公教育に携わって

1934 年に生まれて、順調に行けば 1 年生に就学できたのですが、その 1 年前に左足に大きな怪我をいたしました。そのため、入学時は“就学猶予”という制度の下に、1 年間自宅で過ごしました。その際母親が先生の代わりになって、新しい教科書でいろいろと教えてくれたり、小さなオルガンで歌を歌ってくれたり、ポータブル蓄音機でレコードを聴かせてくれたりと非常に優しく、また厳しく接してくれました。

この１年間の学校に行けなかったという体験が、後の自分の教師になりたいという一途な思いの元になっております。

このときに自分の内なる石につまずいて、それが後々の自分の進路を決めるなんて、当時は思いませんでしたが、今振り返ってみるとそれが自分の生き方の第一の目覚めであったかと思います。

そして、主に小学校ですが公教育に携わり、34 年間の勤務で和歌山市に住んでいた５年間を除いた 29 年間が岸和田でした。また 29 年のうちの 10 年間だけが学級担任で、後は市教委の方へ行ったり、あるいは管理職となって出たりと非常に変則的でした。10 年間の学級担任をした時の思い出が、一番の宝物でございます。本当は 60 歳まで勤めたかったのですが、ここでもまた足の怪我がもとで、もう走れない、子どもの前に立って何もできない、マラソンにも参加できない、これではもう教師の資格がないと思い、56 歳の春に子どもたちに卒業式の祝辞を申し述べるとともに自分も卒業させていただきました。

退職してから、一体これから自分は何ができるのであろうかと思い悩んだ時が、私の生涯学習の第一歩であったと思います。

その頃は、岸和田市も生涯学習に関してノリノリで頑張っておられたので、それが一つの指針となりまして、図書館の詩の教室へ入れていただきました。詩の教室では非常に厳しい講師の下で、ことばの表現というものを叩き込まれてきたように思います。そのうちに、もっともっといろいろな文章（表現）に接したいと思いまして、生涯学習の自主学習グループの一つである読書会「若葉」に入れていただきました。

そこでたくさんの本、一年間で 10 冊読み、20 数年続けてまいりました。同時に歌うことも好きで、教師をしていた頃も音楽が大好きでしたので、たまたま入れていただいたのが混声合唱団の「コール・ルヴォワール」という素敵な合唱団でした。

ですから最初は詩を書くことが中心でした。これは非常に孤独な作業です。また別のところでは、難しいけれどもたくさんの本を読ませていただき、あるところでは大きな声で一緒

になって歌を歌わせていただくという三本の道をまっしぐらに歩んできました。

しかしよく考えてみると、この三つは心の奥深いところで一つになってつながって今日まできたように思います。

そうやって勉強しているうちに、ふと気がつきました。それは、いつも自分が住んでいる町を通り越して、図書館や公民館、自泉会館へ行っておりましたが、生まれ育った岸和田に、今住んでいるこの町に、何一つお返しをしていないということです。これでは駄目だ、この歳になったら少しは自分を育ててくれた町の皆さんに何かしていきたいと思っていた矢先、社会福祉協議会の“地域のふれあい活動”というのがあり、その運営に誘っていただいたこともあり、入会いたしました。そこで“ふれあい活動”をさせていただいています。

しかし高齢者の多い町ですので、ふれあいといっても高齢者が高齢者を支えていくという形ですが、驚いたことに88歳になる方が一生懸命やっていらっしゃるので、それなら私もできるだろうと思い現在まで続いています。

もうひとつは、町内で非常に歳を取っていて一人暮らし、あるいはどこかに行きたいんだけれども行けない、話し合う場所もない、そういう方々のために会館を開放して、せめて月に２回くらいは一緒にお茶を飲む、そんな場所をつくろうと話が出ました。それが大体の見通しがついた時点で私にも声がかかり、今は月２回上松台西町というところで喫茶店を開いて、ウエイトレスをやって「いらっしゃいませ」「何になさいますか」と楽しく遊ばせてもらっています。ここまできてやっと今、自分の居場所を見つけたという気持ちでいます。

長い一生いろいろなことがありますけれど、先ほど講師の方がおっしゃったように学びたい、皆さんと一緒に何かしたい、もっともっと役に立つことがないかなと、そういう意欲をもっている間は、齢もとらないと思いまして、半分はボケ防止ではありますが、今日までまいりました。

最初、自分の足の怪我で入学が１年遅れてしまった、その間の悔しさと学校への憧れ。それが自分を教師という職業へ導いてくれた。しかし、また足のトラブル(股関節人工骨置換)で教師の仕事を辞めざるを得なくなり、そこが生涯学習のスタートとなりました。そして今は、地域の皆様に何かお返しをというところまで辿り着き、毎日を過ごしております。

“喫茶ボランティア”って一体何をやっているのかといわれると思いますので、つたない作品ですがスケッチをした詩を読ませていただきます。

『 手づくりサロン 』

天気　上々
公園の紅葉　うきうき

さあ　がんばっていきましょう
がってん　任せといて！
白い三角布　きりりと結び
色とりどり　サロンエプロン
ウェートレス十人　平均年齢七十余歳

コーヒー　紅茶　ジュース　緑茶
お菓子もついて　百円均一
手づくりのクロス　さっと広げ
卓上の一輪挿し　われもこう　えのころ草
お冷のポット　まんなかに
ＢＧＭはシャンソン　枯葉　アラカルト
町の会館　喫茶たんぽぽに変身

準備　ＯＫ
いらっしゃい　いらっしゃーい

※

まんまるおばあちゃん　座布団抱えて
つづいて　あ、奥さんを亡くしたあの方
ひとり暮らしでもう半年　笑顔がうれしいね
あちらから　こちらから　みな顔見知り
はずむ話　おや　訳ありそうね　低い声
コーヒーおかわり　閉店までの二人づれ
十坪のお店　大入り満員　テラスも満員
はみ出た子ども　青空　ぶらんこ
何になさいますか　お決まりですか
大いそがし　右往左往　カップ傾く
あら　ごめんなさい　注文とり違えたわ
いいんだよ　紅茶で結構　繁盛だね
おつりはいらない　寄付するよ
社協から　となり町から　老人ホームから
一杯の輪　小さな輪　大きな輪
ほかほか　立ちのぼり　渦になり

飛びかうことば　ひとつに溶け
和みの顔　恵比寿　大黒　七福神

※

夕日　けやきの幹　のばし
あっ　という間の百五十分

気軽に来れてよかったよ
水曜日　楽しみね
ぬくもりの背　ゆれて　家路へ
おしゃべり喫茶　店じまい
六十人の息づかい　漂い残して
さあ　急いで片付け　もうひとふんばり

コーヒーメーカー　立ちどおし
ちょっときつかったけれど
楽しい居場所　ひとつもらった
お疲れさま　次もよろしく　ね
腰さすり　首まわし　肩たたき
ウェートレス十人　笑顔　無事解散

はぜの木のてっぺん　下弦の月ひっかかり
家々の窓灯り　見あげ
知らずしらず
　♪　空のはて
　　今日もわれらの
　　夢を呼ぶ

レジメ

私を育ててくれた郷土の道　　西山　光子

１．岸和田に生まれて

２．公教育にたずさわって

宿命的な気がする…
充実の日々と挫折と模索と…

３．私として生きるよろこび

図書館とのよい付き合い
図書館友の会のメンバーとして
現代詩を学ぶ

公民館自主学習グループに参加
読書会「若葉」に在籍

混声合唱団「コール・ルヴォワール」のメンバーとして

気付いたときがスタート

４．地域の活動の大切さ（自分も高齢者でありながら高齢者対象の活動？）

ふれあい活動（社会福祉協議会　小地域ネットワーク）
地元の町での「ふれあい」活動への参加

「喫茶たんぽぽ」のメンバーとしての奉仕
「喫茶たんぽぽ」は上松台西町で自主自発的に立ち上げた高齢者中心の人々のサロンです。

【 著書 】

『 詩集 歩きましょう 』　澪標（みおつくし）　2000 年 4 月 発行

『 詩集 惜春（せきしゅん） 』　澪標（みおつくし）　2010 年 11 月 発行

上月（こうづき）　正洋（まさひろ）　氏　（障害者学級しゃぼんだま　代表）
「 学びから生きる力を 」

社会福祉法人 いずみ野福祉会　東山自立センターぶなの森　勤務
認定 NPO 法人　トゥギャザー専務理事
岸和田市ボランティア連絡会副会長

障害者の就労問題に取り組む傍ら「ひとりぼっちの障害者をなくそう」を合言葉に、月に１度日曜日に活動している。
障害者学級しゃぼんだまを 30 年間支え続け、学級生である障害者とボランティアをつなげている。
就労（支援学校を卒業）した障害者が、地域の中で様々な体験をすることで仲間とともに生きる力を身につけ、より働く喜びを感じられる学級活動を目指している。

【岸和田市障害者学級しゃぼんだま　学級憲章（抜粋）より】
・同じ時代を生きる仲間として、支えあう関係をつくっていきたいと思います。
・それぞれが主体的に自分の能力と個性を生かし、学級運営に参加することで、人間性を豊かに高めていきたいと思います。
・学級活動への理解を市民に広げていく活動を通して、一人ひとりが地域社会の一員として大切にされる社会をつくっていきたいと思います。

障害者学級しゃぼんだま代表の上月（こうづき）と申します。よろしくお願いいたします。

まずどういう活動をしているか、お話させていただきます。

障害者学級しゃぼんだまは、もとは岸和田市青少年課の所管の団体の一つでした。私が就職でこちらに来た時には既に活動していたので、かれこれ 32 年間この活動が続いています。

少し前まで障害者については、教育でも猶予や免除といった時代がありました。その後、養護学校の義務化があり、障害のある人たちも働くようになってきたという流れがあります。その中で作業所もたくさんでき、企業に勤める人もいて、地域に障害者の方が出てきたという時代でもありました。

またこの頃、1981 年「完全参加と平等」というテーマで「国連障害者年」、そして「国連・障害者の 10 年」（1983－92）という時期でもあります。

当時は、障害者というとまだずっと家にいたりだとか、私が就職した頃は、座敷牢のようなものがあったと聞いたこともあります。障害者が街に出るというのは、まだまだ珍しいというか、やっと始まったばかりでした。

「ひとりぼっちの障害者をなくそう」ということで、いろいろな活動を通じて学んでもらおうと始められました。

当時は、岸和田市の方や作業所の職員、学校の先生、学生やいろいろな職業の方に集まっていただきまして、準備会を開き、11 月 12 月から活動を始めました。

どういうことをやっているかお見せしたいと思います。

４月は、みんなでハイキングへ行きました。お弁当を食べたりだとか、グループに分かれてたけのこ堀をしたり、採れたたけのこを炊いたり、お土産に持って帰ったりしました。

５月には、総会があります。当事者が参加して、皆で年間どのようなことをするかを決めます。皆から意見をもらい、それに伴ってどのようなことをするか決めて進めていくというかたちでやっております。

６月はボーリング大会です。一般のボーリング場でチームに分かれて行います。障害者の場合、仕事に行ってお金を稼いでも、お金の管理は親御さんがしているというケースがすごく多いです。本人にしても、お給料や年金は、全て親御さんが管理しているので、なかなか自分で使うということがなく、お小遣いをもらって使う形になっています。ですから、他の同年代の人たちと同じように、遊んで、また明日から頑張って働こうという風につなげていければと思い、こういう活動をしています。

７月には、映画を観ます。最初はプロジェクターを使って皆で観ていたこともあるのですが、何回か重ねるうち「映画館でちゃんと観ようよ」ということになり、映画館に行くことになりました。当初は、暗がりの中 2 時間３時間耐えられるかなという心配もあったのですが、やってみると意外と集中して観ることができました。最初の頃は前の席の背もたれを蹴ったりなどいろいろありましたが、特に奇声を上げることもなく、映画をちゃんと楽しめました。

８月はプールです。支援学校を卒業した後というのは、身体を動かす機会がすごく少なくなります。ですので、身体を動かす企画というのは非常に大切になってきます。とりわけ肥満になる人が増えますので、身体を動かすということを積極的に取り入れています。親御さんも高齢になってくると、なかなか一緒に運動等につきあってあげられなくなってきます。そこで、じゃあ一緒にやろうということで、プールやハイキング、ボーリングなどを取り入れています。

今年度の９月は、カヌー体験をしました。カヌーをやっている方たちに協力をしていただき、しゃぼんだまとのコラボレーションで、カヌー体験をするため、泉南の里海公園へ行ってきました。

ここの公園の方たちとも関係を作りながら、またカヌーをやっている方たちも何か協力が出来ればいいなということで、自分たちの舟を持ち寄ってもらい、なかなか出来ない体験を一緒にさせていただきました。そのようなつながりが広がっています。

10 月はイモ堀りをしました。今回はすごい大雨になってしまい、施設のビニールハウスの中でゲームをしたり、焼き芋をしたりしました。

12 月はコンサートを開催しました。プロの方にも入っていただくのですが、参加型でやっています。その準備をみんなでしようということで、11 月はカードを作ったり、歌や踊りの練習をしました。また、市民の方にも見ていただきたいので、準備をみんなでやっています。当日は、中央公民館で『童謡サロン』という童謡で踊ったり歌ったりする方たちに来

ていただきました。

12 月のコンサートと先ほどのカヌー体験というのは、できるだけ多くの市民の方に知っていただきたいということで、コンサートは一般の方々に、カヌーのときは、しゃぼんだまの学級生以外の障害者の方にもお声がけをして、少しでも多くの方に知っていただき、参加していただければということで企画しております。

今月は繁昌亭（はんじょうてい）での落語を聴くため、みんなで電車に乗って行ってきました。落語というのはなかなか難しくて、「今日は何をした？」とたずねると『映画観た！』「いやいや映画じゃないでしょ。落語でしょ？」『落語観た！』「落語は“聴く”でしょ？」と、そういう会話をしながら、少しでも記憶に残り、こういう体験が楽しかったと思ってもらえればと思っています。

来月は、恒例の餅つきです。もともと「障害者･児を守る会」というのが母体ですので、その人たちも一緒に招いて､その関係する障害者の方たちも出来るだけ多く来ていただいて、サンアビリティーズで、餅つきをしております。

お手元の資料に入れさせていただいていますが「障害者学級憲章」というのを作りまして、総会の時には、学級生皆でこれを読むようにしています。

一、　毎月の学級日では、障害をもつ人・もたない人が、共に、文化・スポーツ・創作・レクリエーション活動を楽しみながら、同じ時代を生きる仲間として、支えあう関係を作っていきたいと思います。

一、　それぞれが主体的に自分の能力と個性を生かし、学級運営に参加することで、人間性を豊かに高めていきたいと思います。

一、　学級活動への理解を市民に広げていく活動を通して一人ひとりが地域社会の一員として大切にされる社会をつくっていきたいと思います。

地域との関係をつくりながら、その懐の中で学ばせていただき、生きる力を身につけていけるという活動を目指して学級を続けています。

かれこれ 32 年、みなさまや多くの先輩たちも含めてご協力をいただきながら、このような活動をさせていただき、今後のこの活動を次の代へ、また次の代へと続けていければと考えています。

ありがとうございました。

桜井（さくらい）　一宇（かずたか）　氏　（NPO 法人 ファザーリング・ジャパン関西 理事）
「 子育てから地域へ 」

『父親を楽しもう！

父親が変われば家庭が変わる、地域が変わる、企業が変わる、社会が変わる』

きしわだまちなかパパカレッジ代表、きしわだプレーパーク代表兼プレーリーダー、NPO 法人 ファザーリング・ジャパン関西理事など、多数の顔を持つ。

平成 23 年度公民館定期講座「イクメン」の講師。現在は仲間たちと公民館の施設開放「パパサロン」を月１回開催。

公民館活動等さまざまな活動を通して、子育てと地域をつなげる活動をしている。

★★……★★★★……★★……★★★★……★★

「僕には夢がある」

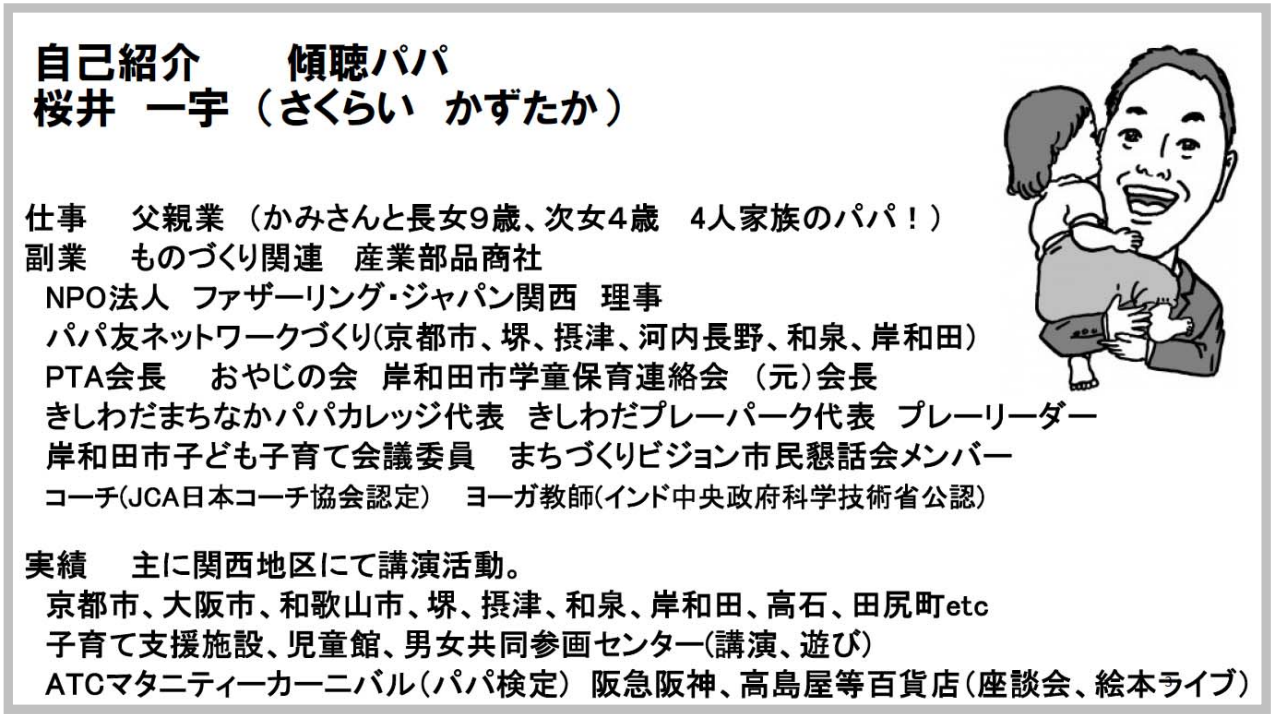
「子どもたちの未来をより可能性にあふれた社会にする夢が」

いきいき市民のつどい「子育てから地域へ」ということでお話しさせていただきます。少し質問です。笑ってますか？

私は、NPO 法人ファザーリング・ジャパン関西というところに所属していまして、「笑っている父親を増やそう」ということで笑っている父親を増やす活動を中心にしています。

ではファザーリングってなんやねん？ということですが、ファザーリングという言葉を聞いたことはありますか。これは造語で“ファザー”（父親）にｉｎｇをつけてファザーリングといいます。父親を楽しむこと。笑っているパパがええやん。ということで、いい父親ではなく、笑っている父親を増やす。いい父親というのは、何がいい父親なのか人によって様々だと思います。お金を稼いでくればそれでいいというパパもいます。でも笑っている父親というのは、子ども達もママ達もみんなが大好きです。ファザーリング・ジャパンは日本全国各地に支部がありまして、今 400 名を越えています。様々なパパがいまして、学生のパパがいれば、サラリーマンのパパもいますし、病院で働いていたり、行政の方などさまざまなパパがいます。いろいろな視点から、自分の目の前にある問題等何とかしていこうとさまざまなプロジェクトに関わっております。　詳細はホームページをみていただけたらと思うの

ですが、父親が当事者として社会問題をより良くしていこう、もちろんその前に自分の家庭、地域を良くしていこうという活動をしています。



自己紹介です。仕事は父親業で、かみさんと長女９歳と次女４歳の４人家族です。副業で、ものづくり関連・産業部品商社です。NPO 法人ファザーリング・ジャパン関西の理事をしております。あとは、きしわだまちなかパパカレッジで父親のネットワークを考えてやっています。子どもの遊び場である“きしわだプレーパーク”では、プレーリーダーをしています。

本業はパパです。子どもがもともと好きで、子どもが生まれた当初は益々頑張ろうと思い、毎月 400 時間程働いていました。当時の価値観で、父親というものは、お金を稼いで頑張っていかなければならないと思っていました。うちは共働きなのですが、ママも働いている中で、子どもが小さい頃熱を出した際、どうするかとなったとき、「男は仕事。稼いでなんぼ」という発想でしたので、当然ママが仕事を休んで子どもを看るという夫婦分業が当たり前だと思っていました。

ある時、仕事から帰って来ると、かみさんからの手紙がありました。遅くまで仕事をして帰ってきているので、その手紙には「いつもありがとう」「お疲れ様」などのねぎらいの言葉が書かれていると思ったら「何のために働いているの？自分にとって最も大切なものは何なの？」と書かれていました。当然家族が大切だと思うから働いているのに、家族はそういうことは望んでいなかった。もちろん仕事をしてお金を稼ぐことは、必要なことかもしれません。子どもとの時間、家族の時間、それが大切なのではないかと、その手紙から自分自身の働き方を意識しはじめました。どういう働き方をすればいいのか、どういう価値観でやっていけばいいのか、すごく意識しながら働いてきました。答えはないと思うのですが、如何に働くかということを常に意識しながら働いています。仕事だと効率化であったり、費用対効果等求められるわけですが、子育てとはそういうものではなく、24 時間続くわけですし、成果なんてすぐに出るわけではないです。

働き方や家庭での在り方、関わり方など意識しながら、生きていく中で、そうこうするうちに次女が生まれまして、ファザーリング・ジャパンにも出会いました。

本業はパパ

子どもが生まれた当初、
**　毎月400時間程働く**
かみさんからの手紙
最も大切なものは何？
次女の誕生、FJとの出会い
家庭、仕事、社会活動、
父親業ってスゴイこと！

ファザーリング・ジャパンには様々な父親がいます。当然家庭で楽しんでいるパパや仕事をバリバリしているパパもいるのですが、さらに地域でも、すごく活動しています。子ども会をやったり、ＰＴＡをされているパパもたくさんいます。知り合いに上場企業の社長をされていて、普段は滅多にお目にかかれない方なのですが、あるとき話をしていると、会社では何億、何十億というお金を動かしているのに、地元に帰るとＰＴＡのお金が 50 円足りないと悩んでいました。このギャップが面白いのですが、地域というところが自分自身をすごく成長させてくれていると話されていて、家庭・仕事・地域活動と様々なことをされており、すごいなぁと感じます。いろいろ見ていると、自分の子どもの未来を考えたとき、自分の子どもだけが幸せな未来というのは無いわけです。自分の子どもが住んでいる地域、これも幸せでなければ、自分の子どもも幸せではない。

自分の地域を、あるいは子どもの未来をどのようにやっていけるのか。父親として、自分のこととして、どうやっていけるのか、そこにもっともっと関わっていかないといけない。家庭だけでなく、仕事だけでもない。父親ってすごいなと思いました。

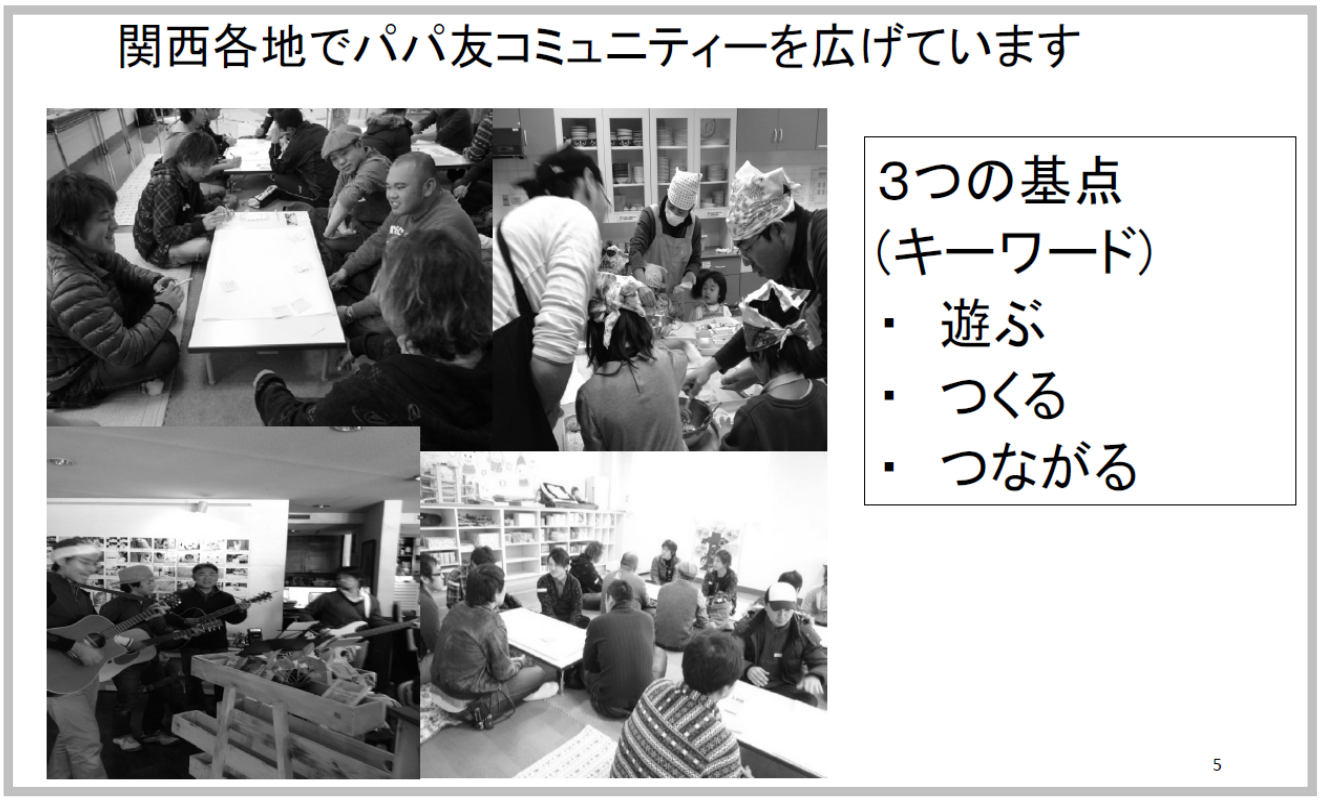
地域や社会の全てにおいて、子どもというのは、地域に出て行くときのパスポートになるんですね。私は、子どもが生まれたことによって、地域へ出ることが出来ました。

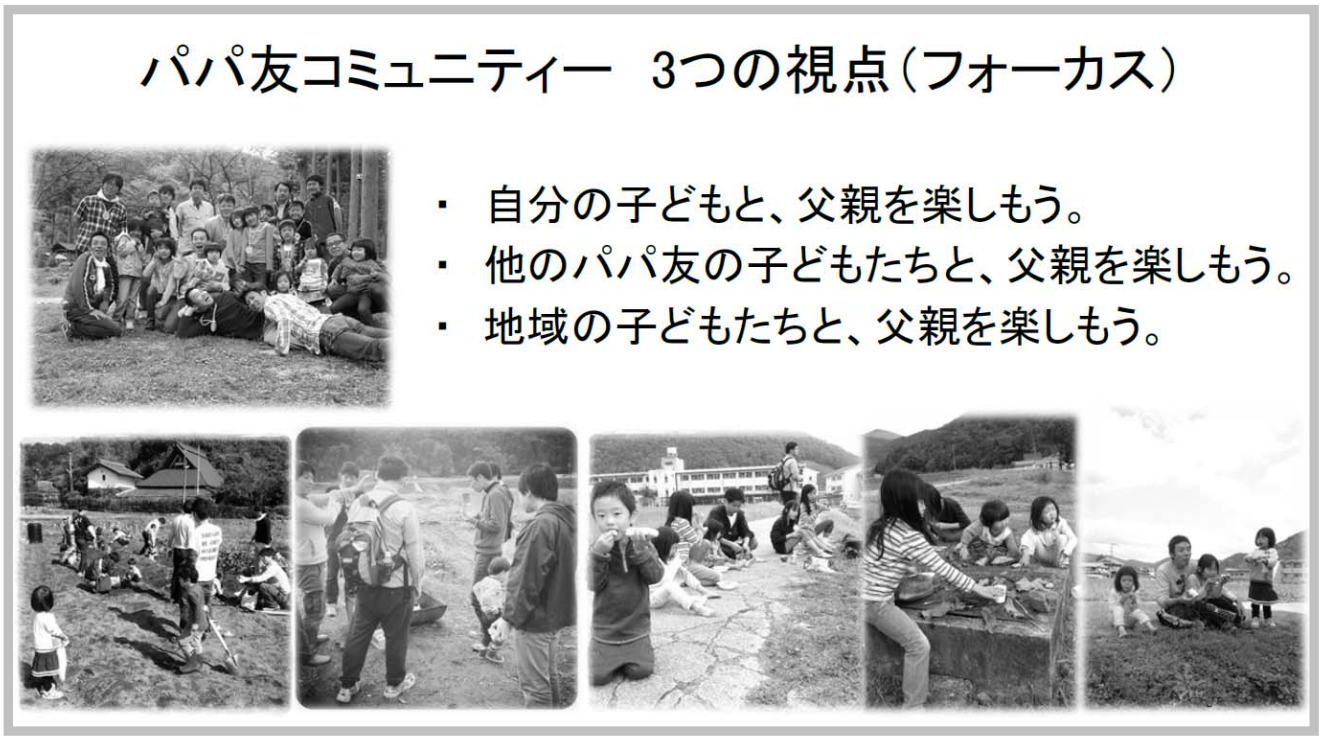
父親業ってすごいなーと思いまして、そこから活動をはじめました。

関西各地で、パパ友コミュニティーというのをやっております。３つの基点・キーワードがありまして「子どもと遊ぶ　つくる　つながる」ということを意識しております。

パパ友コミュニティーをやるなかで、フォーカスしていることも３つありまして、まず「自分の子どもと父親を楽しもう」です。自分の子どもとさえ楽しむことができな父親達がたくさんいます。

だからまずは、自分の子どもと遊ぼうということです。





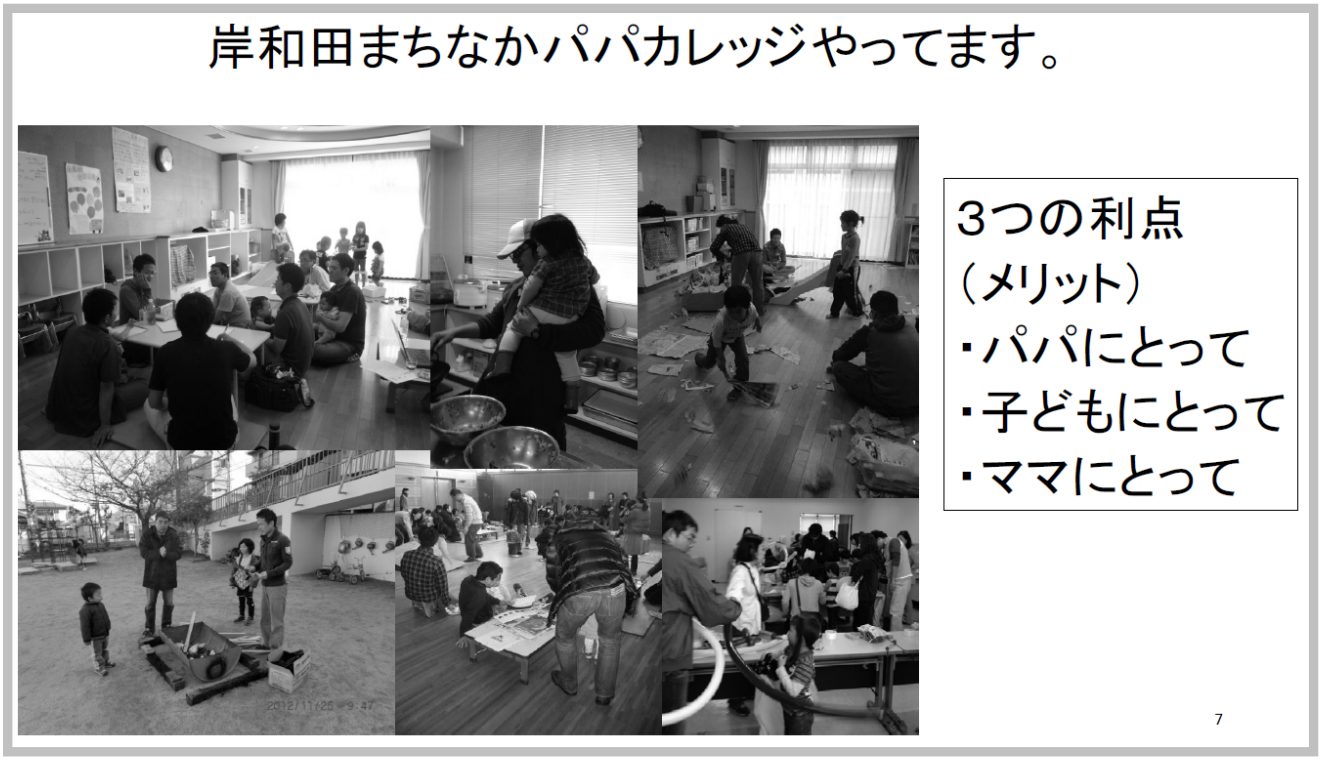
父親同士でつながっていくと、他のパパ友の子どもたちの成長も自分の子どもと同じように楽しいです。そうやってさらに視野を広げる、“地域の子どもたちとも父親を楽しもう”というところまで、視野を広げていこうとしています。

生涯学習課さん、公民館さんと一緒に「きしわだまちなかパパカレッジ」というのもやっています。ここでは、メリットというのを意識しまして、“パパにとって 子どもにとって ママにとって”ということでやってます。

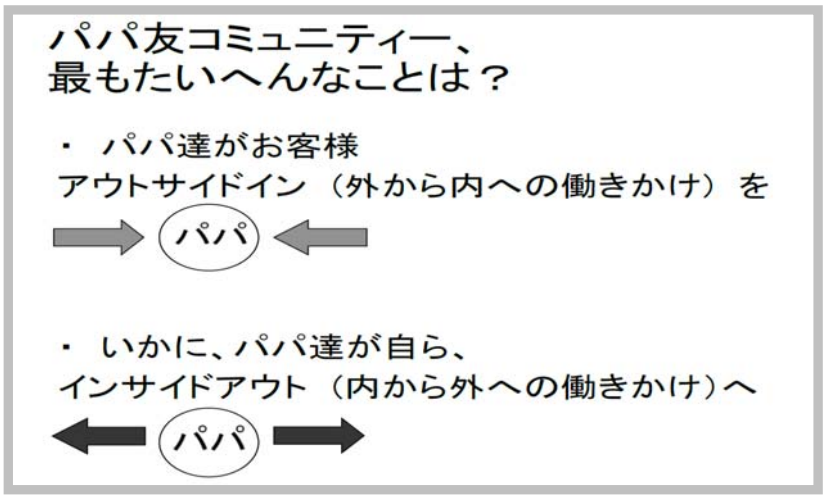
例えば、“子どもにとって”というのを少しお話させていただくと、子育てってママだけがやるとママの価値観が子どもの価値観につながっていきます。そこに父親が子育てに関わっていくと、父親の価値観とママの価値観、当然違うところがありますので、子どもは自分で選ぶことが出来る。価値観の選択というのは、子どもにとっての豊かさになると思います。豊かさというのは、選択肢の多さではないでしょうか。

そこに様々な父親達が子育てにかかわっていくことによって、子どもはこの価値観を様々なところで選択することが出来る。例えば、椅子から跳んだとき、ママだけだと「危ない」と言うかもしれない。だけどそこに父親が入ると「よし！跳べ跳べ。どこまで跳べるかやってみよう」と言う。子どもにすると、ママは跳んではいけないと言うけど、パパは跳べと言う。どうすればいいのだろうと考える。このことが、とても大切なのではないのかなと思います。

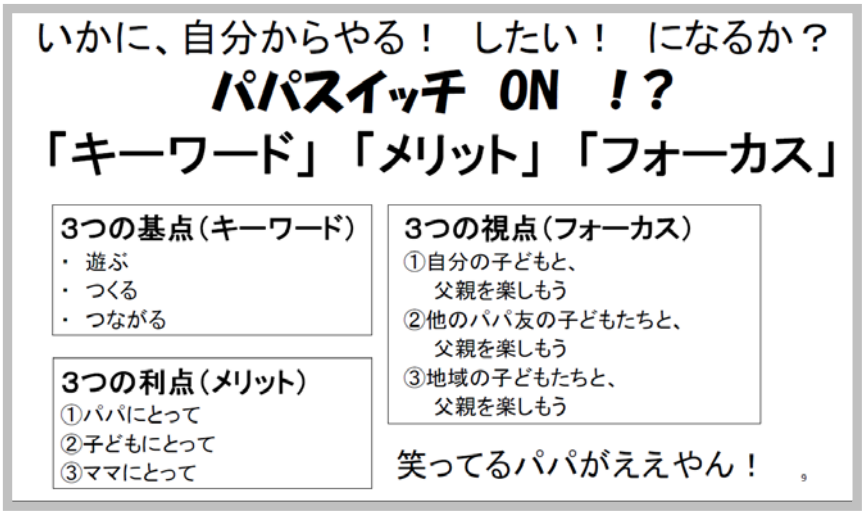
ここにたくさんの父親が入ってくると、もっと違った価値観が出てきます。つまり可能性が増え、選択肢が増えるということは、子どもたちにとってはとても良いことではないでしょうか。



いろいろな機関紙等でご紹介いただいています。「いきいき学びのプラン」や「まみたん」「日経」全国版です。書かれたのが３年前ですが、ママに「退職までに地域でつながりをつくっておくのもいいよ」とパパカレッジの申込みをされて、３年後に新聞の全国版に掲載されました。３年で生き方って変わるのだなと思いました。



パパ友コミュニティーで、最も大変なことは何かなと見てみると、当初パパたちはお客様感覚で、何をしてもらえるのだろうという意識でした。そこをいかに自分達で自らやっていこうというところまで意識を変えていくのか。パパスイッチに切り替えるのか。



いかに自分が主体になるかということで、３つの基点・視点・利点ということを意識しています。

キーワード・フォーカス・メリットを通して、「笑ってるパパのほうがええやん」、「もっともっと楽しもう」ということへつながっていくのではないかと思います。

まちなかコミュニティーねっと　きしわだプレーパーク
～岸和田中にプレーパークを～　の活動紹介

一昨年度より、岸和田にも子どもたちの冒険遊び場、
プレーパークを！とはじめました。

岸和田では、パパたちや、パパとママたちのつながりから「きしわだプレーパーク」というのを始めました。現在、不定期ですがやっています。“岸和田の子どもたちに冒険遊び場、プレーパークを！”と始めました。プレーパークって何なのか。子どもたちの遊び場なのですが、遊具等はなく自然のもの、火・土・水や木といった自然のものを多く使って、自分のしたいことをしようというものです。「A：危ない」「K：汚い」「U：うるさい」ということで、私たちは“AKU（アク）”と呼んでいます。子どもが遊べない状況が強いと思うのですが、「A」危ないから、してはいけない、「K」汚い、よごれるからやめなさい、「U」うるさいから静かにしなさい！等々です。公園の中でボール遊びをしてはいけません、ひどいところになると公園で騒いではいけませんというところもあるようですが、子どもたちがやりたいことをやれる遊び場を作ろうと、日本全国に 300 箇所くらいあります。自分がしたいことを自分の責任でする場所です。よく「何かあったらどうするの」と言われるのですが、この言葉がどれだけ多くの可能性をつぶしてきたか。この言葉によって、様々なことが出来なくなってきているような気がするのですが、空き地がなくなったのは、空き地で遊んでいた子どもが怪我をすると、その空き地の所有者の管理者責任となるので、その結果、空き地はなくなり、また入れないようにされたりしました。プレーパークでは、自分の責任で遊ぼうということでやっています。もちろん大人向けの言葉ですが・・・

社会では「子どもが、まん中」。この点「、」が 1 箇所違うだけで「子ども、がまん中」になっていないですか。子どもが「自分はこれをやりたい」と思うときのモチベーションはすごく強いと思います。やりたいと思ってやり始めるきっかけが、やはりとても少なくなっているのではないかと思います。

自分のことを少しだけお話させていただくと、小さいときは、年上の子たちと子どもたち

同士で遊んでいました。最近では、なかなかその機会が減ってきていると思うのですが、群れの中で遊ぶことによって、相手と何をして遊ぼうと考えたり、発想の柔軟性であったり社会性、協調性であったり、自分たちでルールを作っていく力を身につけていくのではないかと思います。今はどちらかというと、与えられたルールの中で遊ぶなど、だんだん遊び方が下手になってきている気がします。『３DS（ゲーム機）』などはそのルールの中で遊ぶので、発想の柔軟性がなかなか出てこないと思います。そういう中で、この遊び場というところで、自分たちで遊んでいくという難しさを感じています。

この遊び場なんですが、地域のつながりの場所にもなってきています。子どもたちを中心に地域がつながる町にもなってきています。

ただ一つ思うのは、地域のつながりは、子どもを見守る目という視点で見たとき、少子化といわれている今日において、子どもから見るととても大人が多いということです。

私たちの時代は、団塊二世といって子どもが多かったので、結構大人の目を盗むということが出来たのですが、最近はなかなか大人の目を盗みきれていないのかなと思います。そういう中で、この「見守る目」と「監視の目」、どちらだろうかと我々大人は意識していかないといけないのではと思います。

みなさん、周りを見ていただいたときに“つくる”ということを最近されていますか。ご飯をつくるくらいかなと思いますが、ご飯もひょっとすると“消費する”になってきていたり。遊びも同じで“消費する”ということがすごく多くなってきている気がします。

しかしこの“つくる”というところから発想力が出てくるのかなと思っています。

プレーパークって？

普通の公園ではありません。
プレーパークは、普通の公園のようにきれいに整備されていません。廃材とロープによる手づくりの遊具が置かれ、丸太が転がり、穴もあちこちに掘られ地面もでこぼこです。そこで子どもは、火･土･水･木といった自然と、道具や工具を使っておもいおもいに遊んでいます。

12

まちなかコミュニティーねっと
きしわだプレーパーク
～岸和田中にプレーパークを～　3つの活動目的

① 子どもの遊び場、プレーパークをつくり、広げていくこと。

② 子育て世代の地域参画

③ 地域の居場所づくり。

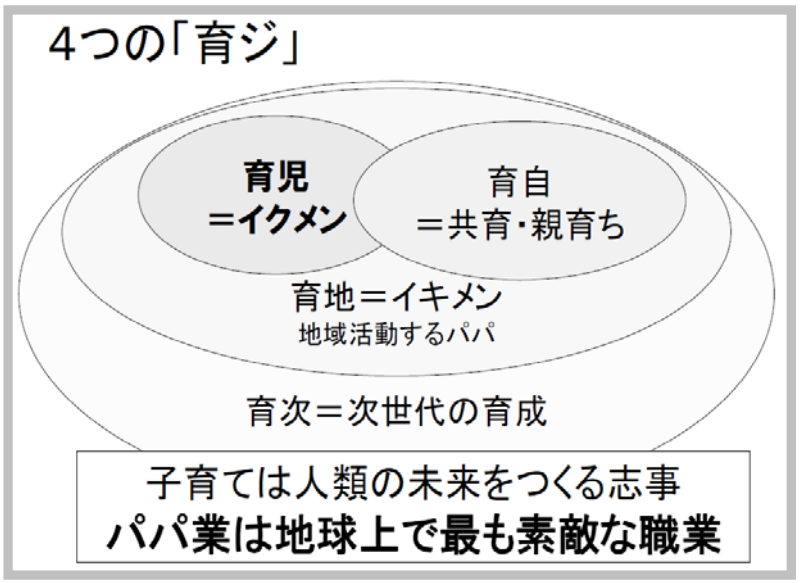
プレーパークの活動目的を３つ上げております。まず子どもの遊び場、プレーパークをつくり広げていくこと。父親のコミュニティ、そこからつながりができたママたちや地域の方と遊び場・プレーパークを作って広げていこう。そしてその場所を作っていくことで、子育て世代の地域参画を願っております。

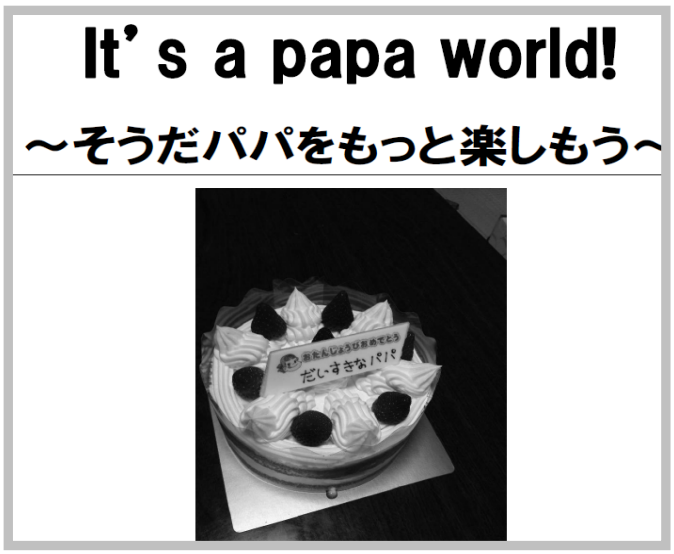
子育て世代というのは、仕事や家庭・育児、人によっては介護を含めて、とても忙しいので、地域になかなか参画できない状況にあります。このプレーパークを続けていくことによって、子どもたちに居場所を作っていこうというモチベーションの中で、地域活動がつながっていくのかなと思います。

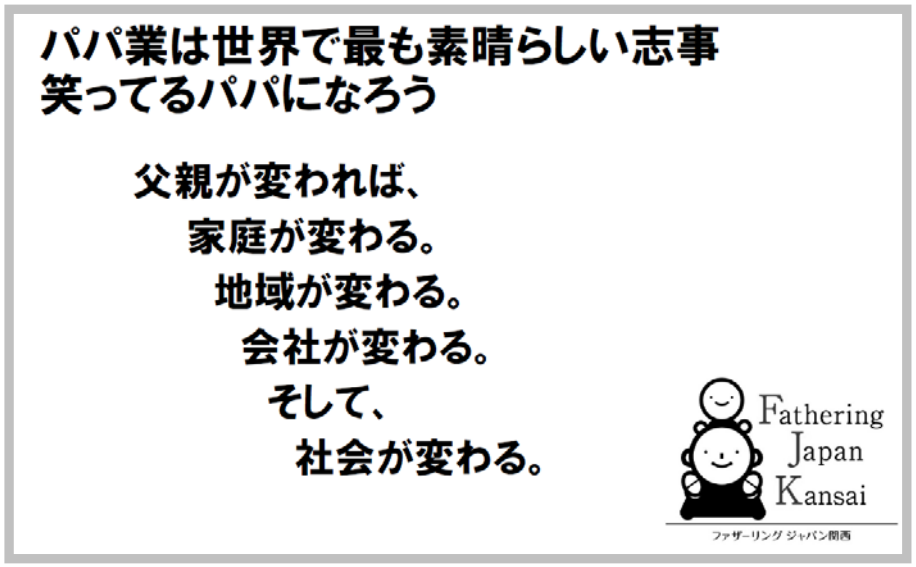
プレーパークを作っていくことで、地域の居場所作りになっていくのではないかなと思っています。

４つの「育ジ」ということで、まずは“育児”イクメンからスタートしまして“育自”親育ち、共育です。そして“育地”イキメン、地域で活動するパパです。そして“育次”次世代の育成ということを意識しております。

子育ては人類の未来をつくる志事、パパ業は地球上で最も素敵な職業という意識をもっております。







『パパ業は世界で最もすばらしい志事　笑ってるパパになろう
父親が変われば、家庭が変わる。地域が変わる。会社が変わる。そして、社会が変わる。』
ということで活動しております。
　少し長くなりましたが、ご清聴ありがとうございました。

～ディスカッション～

（コ）：コーディネータ
　　多田　昌史　氏（嬉野台生涯教育センター　所長）
（西）：西山　光子　氏
　　（市立図書館「詩の教室」所属、詩人）
（上）：上月　正洋　氏
　　（障害者学級しゃぼんだま　代表）
（桜）：桜井　一宇　氏
　　（NPO 法人ファザーリング・ジャパン関西　理事）

（コ）：それぞれの活動状況をお話しいただきました。一つ一つの活動に興味、関心があるのですが、今日は生涯学習がテーマですので、できるだけそちらの切り口から議論していきたいと思っております。私からまずお三人の方に共通するようなことをお尋ねしたいと思います。
生涯学習というのは、先ほど講演の中でもお話しましたが、基本的に楽しいものでないといけないと思います。何かやらされているとか義務的にとか、面白くないな、辛いなというようなものであれば、なかなか参加しようという気持ちも起こりませんので、本来楽しいものでなければならない。
そこで、先ほどお話しいただいた活動で、非常に満足感を覚えたことや、充実感や達成感があったこと、やって良かったと感じたことなど、皆さん方が思ったときとはどのような場面であったかということを、お一人ずつお聞かせ願いたいのですが。ご来場の皆さんに、その醍醐味のようなものを教えてあげてもらえればと思います。

（西）：一つは、自分がやりたいと思ってきたことが、何かの形で出来上がっていくときです。もう一つは、そのために周りの皆さんと一緒に力を合わせていく、その仲間とのつながり、これが上手くいくときが一番嬉しいです。例えば、本当に個人的な営みなのですが、苦労して苦労してやっと出来上がった一編の詩が、講師の先生に「これがいいよ」と一言言われることで、来月もやろうかという気持ちになります。それがなければ続けられるものではありません。それから読書というのは、図書館で学ぶ、本を読む、また図書館の雰囲気、特に岸和田の図書館はいろいろ言われますが、あんなに良い図書館はないと思います。狭いけれどもたくさんの蔵書があって、あそこに身を置いていると本当に本を読めるって、「ここはいいなぁ」という満足感が湧いてきます。その中でたくさんの友だちと本をたくさん読める。そういうひと時が楽しいです。それからコーラスは、非常に苦しんで苦しんで何か分らない状態から一つの曲をみんなで仕上げていって大きな声で合唱できるようになる。心身ともに開放されます。これが非常に嬉しい。社会参加といいますか“ふれあい”だとか“喫茶たんぽぽ”だとかそういうところでは、人に喜んでいただける。「良かったよ」「美味しかったよ」「楽しかったよ」と喜んでいただける、その瞬間が大変嬉し

いです。それまでにいろいろ苦労もあるのですが、そこまで仲間と一緒に漕ぎ着けて行けたという達成感をずっと味わえる。その瞬間が一番です。

（上）：ここに来られている皆さんは、多分ご近所のお付き合いもあったり、お友達もおられると思うので、ちょっと想像がしにくいと思うのですが、障害者のメンバーというのは、学校に通っているあいだはいいのですが、支援校を卒業した後に、例えば自分宛の年賀状だとか、なかなか少なくなってしまうものなんです。
あるお母さんから、『以前、街へ行ったとき、うちの子が他の人に「よう！」と挨拶をしたので、「あの人誰？」と聞くと「しゃぼんだまの人だよ」と話していた』という話を聞いて、「やったな！」と思いました。
やはり人とのつながりや周りとのつながりって、障害者の人たちはなかなかもてないですから、自分たちの活動が少しは役に立ったかなと思えた瞬間だったので、そのときにやりがいを感じました。

（桜）：活動していて楽しいことってたくさんあります。楽しいことがあると同時にしんどいこともあります。しんどいことやえらいことを言われたり、何の為に活動しているのかと思っているときに、私がひとつ思ったのが、楽しいからやっているというのはもちろんなのですが、同時に、この活動をしている自分が、すごく成長していってるなと感じることです。楽しくないと人のせいにしてしまいがちなのですが、成長してるかなという視点に立つと、どんなに辛いときでも自分の成長につながっているということに気づくことができるので、そのときやりがいを感じます。

（コ）：今、三人の方が奇しくも全員違った表現をされてましたが、私なりに分析をしましたら、西山さんが言われた中に「先生に褒められると嬉しい」とか、喫茶たんぽぽで「いろいろなサービスをして喜ばれることが嬉しい」というのは、これはまさに生涯学習の醍醐味なんです。基調講演でもお話しましたように、学びっぱなしではなくて、自分が学んだ成果が誰かに評価をしてもらえる。評価の部分があって始めて生涯学習というのは成立するんですね。なにも自己満足で勉強しているわけではなくて、やっぱり学んだ成果を生かした時に励みになるので、悪いという評価もあってもいいのですが、その時によく出来たなとか非常にありがとうだとか、自分のやったことに対して正しく評価をしてもらえる。そのことに喜びを感じるということは、一つの教科書的な内容なのですが、生涯学習の目指すところはそうした部分にありますので、今後、皆さんが活動をされる時には、とても大事なキーワードだと思いますので、よく覚えておいていただきたいと思います。

それから、上月さんがお話しされた「あの人、しゃぼんだま学級の人やで」という、人と人とのつながりという部分で役にたっているんだなと思うことも生涯学習の醍醐味なんですね。基調講演の最後で、佐藤一斎(さとう いっさい)の「言志四録」（げんしろく）というのをお話しましたが、ずっと学んでいたらそれが年を取ったときに世の中の役に立っているというような内容でした。まさに先ほどの上月さんのお話の中の喜びの瞬間というのは、そういったところにあるということが、非常に象徴的だと思っております。

それから、桜井さんはもともと父親を楽しもうということをテーマでやっておられる活動ですから本来楽しいものですが、その中でも特に自己の成長に役立っているという発言をされました。自分が成長しているということが自覚できるという、これも生涯学習の成果でありますので、いろいろな場面でその成果を生かす、あるいは正しく評価される。それが喜びにつながって、そしてまた次に何かしようというアクションにつながるということで、非常に好循環になります。生涯学習をやるということの喜びや楽しみというものは、今お三方がおっしゃった言葉に集約されていますので、どうぞ皆さん方もそういったことがあるのだということを思って積極的に社会参加されることを期待しております。

今度は、個別にお聞きします。

私がかなりすごいなと思ったのが上月さんですが、「障害者学級しゃぼんだま」で、もう 32 年続いているというお話がありました。結構 30 年以上続けるというのは長いですね。活動の途中で心が折れそうになるとか、もうやめたいなと思ったこととか当然あるだろうと思いますし、30 年経てばそれに関わっている方たちも 30 歳分年を取ってしまうわけですが、その中にあってこれだけ継続的な活動を、あるいは連携が生まれている背景や理由がありましたらお聞かせ願えませんでしょうか。

（上）：結果論なのですが、続けようと思って続けたのか、もしくはなんとなく続いたのかもしれません。ただ時代の中で求められることが、少しずつ変化してきているのかなと思っています。それが親御さんを含めて、私たちは当事者に寄り添うということを原点にしているつもりなので、その人たちがどういうふうに考え、どう生きているのかということを、一緒に考えてやっているということが多分続いている理由だと思います。またその中で、変化があるけれども軸足を変えなかったということが、すごく大事だったのかなと思っています。時代とともにいろいろなことが変わりますが、最初の頃は障害者の方は働く場所もなかったけれども、働く場所が出来た。では、働く場所が出来たけれどもなぜ働くのか、働かなくてはいけないのか、なかなか伝えにくいことです。ニーズがいろいろ変わっていく中でもその本質的にあるものというのは、やはり“孤独ではないよ”ということなのかなと思います。それに伴って、実はボランティアもその中で変化をしていっている。ボランティアと障害者をあまり分けないようにしていて、皆同じ学級生として扱ってその中のリーダー的役割だと思ってやっているのですが、実は一緒になってやっているボランティアも最初はリーダー的だったのが、だんだんと社会的課題を背負う人が多くなってきました。そういう中で、一緒に考える素地がもっと出来てきた。距離がだんだんと縮まってきているという感じもしますし、そういうことも一緒にやれるようになったということかなと思っています。

（コ）：支援者のことがお話にでましたが、障害者の方々に関わると支援者の方が変化していくというそういったお話でした。当然 30 年経つと支援されていた方が、一定の時期が来たらそこから去っていくということがでてくると思いますが、またそうすると新しい方々が入ってくるという、その循環というかシステムというのは、やはり代表をされている方々が常に支援者を求める活動をされているということなのでしょうか。

（上）：障害者学級というのは、結構作業所の職員さんがやっているというケースが多いのですが、しゃぼんだまは作業所の職員はほとんどかかわっていません。街の郵便屋さんやおまわりさんになった人もおりますし、学校の先生や看護師さんだとか様々なのですが、そのときそのときに波があって、とても充実しているときとそうでないときがあり、その波の中でなんとなく続いているという感じです。それがあるからボランティア連絡会を皆さんと一緒に立ち上げる中で、自分たちも協力するけれども、そういうニーズがある人たちを探していくという活動もするよう努力をしています。

（コ）：今度は桜井さんにお聞きします。子どもに関わることによって父親はどのように成長したか、変化したかということを具体的にお聞きしたいのと、子ども自体が母親ではなく父親とのかかわりの中でどのような変化が見られたかということをお聞かせ願いたいのですが。

（桜）：子育てが、ママだけの孤独の“孤”育てになっている中で、父親の地域や子育てへのかかわりがすごく大切になってきていると思います。共働きがとても増えてきまして、女性の社会進出ということも安倍政権で言われていますが、当然父親の家庭、地域への回帰ということも必要なことだと思います。自分自身の父親も子育てに結構関わっていたので、当たり前だと思って活動しているわけですが、ただかみさんからの手紙が、自分にとって一番の意識の変化だったと思います。家族との関わり方はとても変わりました。

（コ）：特に父親の立場というのは、会社勤めの姿だけなんですね。自営業の方もいらっしゃいますが、基本的にメインの仕事というものをお持ちだと思います。特に会社勤めのサラリーマンの方だと、こういった活動に参加するというのは、自分の勤めている会社の仕事と時間的にバッティングするだとか、そういった苦労も多々あると思うのですが、その企業側の理解や協力のようなものは、ファザーリング・ジャパンに集まっておられる父親の方々はどういうようにお話をされていますでしょうか。

（桜）：働き方自体は、その方その方のやり方があるので、これが正しいというのはありませんが、その中で働き方の意識はすべきでしょうし、仕事で得た知識やノウハウというものをやはり家庭や地域へ還元していくべきだと思います。せっかく仕事で得た技術であったりノウハウであったりを地域へ還元して、また地域へ入っていくことによって地域で得たものを仕事へ還元していくということをすると、これはまた人生の豊かさがさらに増していくのではないかと思います。

昔は働いていればそれでよかったのですが、今、社会の変化が激しい中で、自分の会社と家の往復だけというのは、自分自身が、正直ガラパゴス化してしまいます。新しい知識がどんどん入ってくる中で、やはり様々な関係性を持った方が絶対いいと思います。自分の場合はシンプルで、結婚する前は趣味と仕事だけでした。それが家庭ができて、子どもができて、子どもができることによって子育てという新しいスキルが入ってきて、それがさらに子どもがいることによって地域に参画することが出来た。すると地域から様々なコミュニティーネットが出来ました。そうすることによって自分の人生が寄せ鍋みたいに、いろいろなものが入ってきてすごく味わい深い

ものになってきているかと思います。
そういう夫と、会社だけの夫だと長い目で見たとき、やはり圧倒的な差が出てくるのではないかなと思います。

（コ）：子どもというのは、当然生き物でございますので、小さい頃にこういうファザーリング・ジャパンのお父さん方と交流して、何年か経てば子どもも大きくなります。どこかで親として子離れする時期が来ますが、そうした子育てが終わる時期が来た後は皆さん方の活動は、どんな展開になっていくのでしょうか。

（桜）：ファザーリング・ジャパン自体は、最後にはなくなるというのが理想です。“父親が地域や家庭に参加する”なんていう言葉がなくなること、“女性の社会進出”といいますが、“男性の社会進出”とは言いませんし、“女性の育児”ということも言いません。その中で子育てに関して、自分の中では一生子育てなのかなと思っているのですが、当然子離れもありますが、その中で変わるのは関わり方なのかなと思っています。私の娘も３年生・９歳で、親よりも友達といる時間が大切になってくると当然関わり方も変わってきます。その中で、自分自身が地域と関わっている一つの理由が、子どもに背中を見せるということです。この背中を見せるという生き方は一生涯変わらないのかなと思っています。最後に「死に様」を見せるところまでが、自分の中では生き方なのかなと思っています。

（コ）：今度は、西山さんにお話を振りたいと思います。
レジメで「私を育ててくれた郷土の道」という非常に岸和田という土地に故郷の意識といいますか愛着を持っておられまして、そこが自分を育ててくれ、自分も今その地に住んでいろいろなお返しをしているということですが、西山さんご自身の人生で故郷岸和田がどういうような役に立っているのか、今日は岸和田市内の方がたくさんいらっしゃいますので、故郷を思う西山さんの気持ちが、自分の人生にどう役立っているか、皆さんにご紹介していただけることがあれば少し聞かせていただけますでしょうか。

（西）：私の心の中にある岸和田というのは、このごく近くなのですが別所町の郊外で、春にはれんげ、たんぽぽが咲き、今の産業高校の近くの小川では蛍も飛んでおりました。そういうところで非常に優しい両親に育てられた。そのことが何よりの糧になっていると思います。一言では言えませんが形があるもの、ないもの全てが、私をここまで育ててくれました。ちょうどネットの一点に自分を立ててみればよく分るのですが、四方八方からいろいろな人たちとの結びつきができあがっています。
これは、長年勤めたということもあるし、ずっと岸和田を離れずに暮らしてきたということもあるし、また自分自身でいろいろなところへ扉を叩いて求めていった結果だろうとも思うのですが、そういう中で本当に豊かに過ごせる、そういうところです。私は外から見た故郷というのを知りませんので、これが故郷、ここしかないという、そういう気持ちも強いです。

余談になりますが、学生の頃「あんたどこからや」「岸和田から」「なあんや。文化果つるところやな」と言われた先輩もおりましたけれども、そういうことには関係なく、やはり自然、人、学べる場所がいっぱいあるということ、特に今は扉さえ叩けばどこでも自分で学べる、そういう環境が整えられているこの岸和田市。その辺ですね。

（コ）：ちょうど西山さんは小学校の校長先生をお辞めになってから、最初は趣味としてちょっとした喜びで図書館や読書会、合唱団の活動にかかわられたのですが、その後がいいですね。ちゃんと地域活動の大切さを理解されて、それを地域へお返しするという、まさに理想とする生涯学習の流れの中に十分いらっしゃる、そんな感じがします。だから若い人はもちろんなのですが、今日来ていらっしゃるご高齢の方も今人生80年なんていうのも人生90年時代といってもおかしくないような時代ですから、まだまだたくさんやることがありますので、一つの先輩といいますか、西山さんをモデルに習っていただければ、皆さん方もどんどん生涯学習の中に入り込んでいけるかなと思います。
我々だけでずっとお話をしているのもなんですので、今日会場にお越しの皆さん方からいろいろな観点からで結構ですので、話が横に広がっても構いませんので、パネリストあるいは私の最初の基調講演も含めて、何か聞いてみたいことや疑問に思ったことなどありましたら、何名の方かご発言お願いしたいのですが。
せっかく時間を共有しているわけですから、何でも構いませんのでご意見等聞かせていただければと思います。

（参加者）私は、現在PTA会長をさせていただいております。そこで西山さんにご質問なのですが、“喫茶タンポポ”を町内の憩いの場として、町内の女性有志で立ち上げたとのことですが、どのようにして立ち上げられたのかお聞かせいただきたいのですが。

（西）：私がお答えをするのは、大変おこがましいのですが、町内にそういう考えを持っておられる先輩の女性がいらして、交流者が増えるような場所があればいいなあという発想から生まれたのですが、実現するまでは非常に苦労がおありだったと思います。でも岸和田市では、名前は違いますけれども他にもっとたくさんそういう場所を提供していらっしゃる町があると思います。そういう所をまず見学して、食べ物を扱うので保健所とも連携をとって、それから予算の問題もあるので、町の活動のどこに位置づけるか。そのあたりの交渉も頑張ってこられて、先輩の女性の熱意で誕生いたしました。
最初は、星が丘などたくさんの町の先輩の方々にも来て頂き、また社会福祉協議会

の方々にも教わって、いろいろ助言をいただきながら開設いたしました。
はじめは、来てくれるかなという不安が大きかったのですが、皆さん誘い合っていただいて、50 名ほど来て頂きました。ただ問題は、いくらお誘いしても絶対に行かないという方もたくさんいらっしゃいます。そういう方には無理強いはしませんが、ちょっとでも来ようかな、あの方お誘いしたら来てくれるかなという方には、さり気なく声をかけて、負担にならないようにお誘いしております。
そういうことで今の問題は、お客さんが固定化されてしまうと少し意義が薄れてしまうので、たくさん来てもらえるように地道にやっております。
私は直接開設には関係していませんでしたが、やはりいろいろなプレッシャーがあったようです。一番力になったのは、社会福祉協議会の方々や既に開設して頑張っておられる方々の指導、ご助言だったと思います。ぜひおやりになってください。楽しいですよ。

（参加者） 私も星が丘を見学させていただいてとても感動し、ぜひあのような場をつくりたいなと思っています。私は PTA 会長として子どもとかかわっているので、老人の方たちの憩いの場があるそこに子どもをかかわらせたいと考えています。どういう風にすればそれができるのか悩んでいるのですが、何かアドバイスをいただければと思います。

（コ）：高齢者の集まっている場所に子どもをかかわらせるということでしたので、これは違った角度から、ファザーリング・ジャパンで子育て支援をされている桜井さんの方から、高齢者の集まっているところに子どもたちが入っていくことについて別の角度からのコメントがございましたら、お願いできますか。

（桜）：まず子どもが入っていく前に地域とつながりをもっていただいて、その上で提案してみてはどうでしょうか。
また子どもの発想力を利用してみるのもいいかと思います。まず子どもに、こうしなさいではなく、どうすればいいか意見を質問的に聞いてみると、私たちでは考えられないようなとても柔軟なアイデアを出してきたりするので、またそこで新しい何かが生まれてくるのではないのかなと思います。

（コ）：また西山さんにお聞きしたいのですが、高齢者の方がいらっしゃる場所に子どもさんたちがやって来て、一種の多世代交流になりますが、高齢の方と小さな子どもさんたちが交流する。そういった交流というのは、これから十分プログラムとして、また企画できる事業内容になり得るのでしょうか。

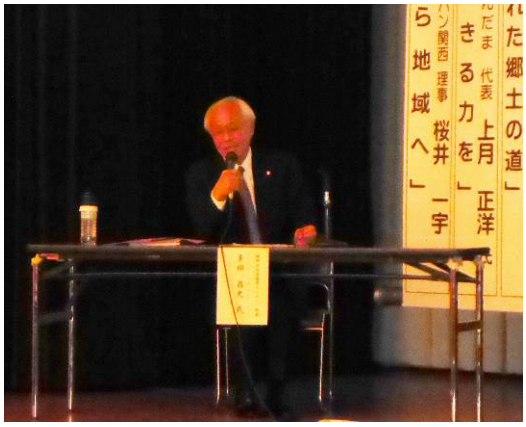
（西）：たとえば市立図書館では、非常に地味ですがいろいろなサークルが活動されています。触る絵本や点字の会、お話用の小物づくりや点字サークル、読み聞かせだとか、そういう活動をしている者が毎年 10 月末の読書週間の頃に図書館まつりというものを開催しますので、そこで日頃の成果を発揮します。そのときたくさんの子どもたちが来ます。そういう子どもたちを対象に読み聞かせをしたり、人形劇を見せたり、あるいは本を売ったりというような活動をしています。
これは公的機関での子どもたちとの接触ですが、他に図書館自体も非常にたくさんの子ども向けの行事を組んでいらっしゃいますので、一度のぞいて見られたらいいかと思います。それから地域のふれあい活動では、対象は高齢者であるけれども、例えば、クリスマス会や七夕の会、ひなまつりだとか、そういう会を企画するときには必ず子ども会のほうへ声をかけます。するとお母さん方が、子ども会に入っているお子さん（幼稚園から中学生まで）を連れて来て下さるので、そこで年寄りと子どもと子どもさんのご両親と、そういう方がひとつになって歌ったり手品を見たり、お話を聞いたりというような会をやっております。だから積極的にその町のいろいろな組織を利用して子どもさんをお呼びして、それにふさわしい内容を考えるという、これも勉強のひとつかなと思うのですが。そういう風に地味に活動していけばいいのではと思います。

（上）：せっかく星が丘のことが出たのでお話させていただきます。
実はボランティアセンターの方からのお声掛けで、そこでパンを販売したいというお話をいただき、うちの施設で焼いているパンをうちのメンバーと一緒に持っていって納品をさせていただくという仕事をしているのですが、コーディネートしていただける機関が一応はあるので、そういうところに入っていただいてアドバイスをいただくというのもいいのかなと思います。うちは、つながりがつながりを呼んでいくみたいなことに偶然なりましたので、そういうことも試されるといい出会いになるのかなと思います。

（コ）：今のご質問で非常に感心したのが、子どもさんたちに積極的に高齢者の方々と交流させたいという気持ち、よく三世代交流とか多世代交流というのですが、“つながっていく心”今日のテーマにもありますが、なにもこのつながっていく心というのは、この同じ時代に生きている我々の横のつながりだけではなくて、我々の次の世代あるいはまた孫の世代、ひ孫の世代という風に、縦のつながりというものもとても大切なものです。前世代の我々からみるとおじいさんやおばあさんが持っているいろいろな知恵や生き方、生きる意欲、まさに「生きる力」ですが、そういったものを言葉によってあるいは作業によって学んでいく。それをまた自分で消化して自分の子ども

にまた孫に伝えていく。これは、自分と血のつながりのある子どもはもちろんのこと、世界の子どもでもいいので、時代を超えて立て向きにつながっていくという意味でのつながる心が大切なのです。
どこかで大震災が起こったからお互い助け合う意味では、同じ時代を生きているという水平的なつながりなのですが、世代を超えて時代を超えて親から子、子から孫へいう縦向きにずっとつながっていく。そういったつながりの仕方というのもとても大事なことだと思っておりますので、ご提案の趣旨の背景には、そういったことを十分にお考えになられているのではないかなと思います。とてもよいご質問だったと思いました。

（コ）：皆さん方の活動は非常に立派だと思いますし、これからどんどん継続していって頂きたいのですけれども、今後その活動を継続する上で何かハードルになるもの、壁にぶち当たりそうなものあるいは課題、そういったものがあるとすれば、それはこんなものだと思うというようなこと、またそれを克服していくためにはどのようなことが必要かお聞きしたいと思います。それと最初のプレゼンテーションのところで十分に言えなかったことや今日この会場の皆さんにアピールしたいことなどありましたらあわせてお話いただきたいと思います。



（桜）：最近ハードル、壁に感じているのは価値観の違いです。この価値観の違いをいかに乗り越えるか。私の経験だけですが、地域で価値観の違いをお互いなかなか認め合えない状況にあるということです。夫婦で価値観の違いから離婚したという話は聞きますが、この価値観の違いをなかなか認め合えない状況が続いているなと感じています。お互いの思いをお互いが認め合って受け止め、尊敬し合える環境というのは、とても大切なのかなと思います。活動しているとやはりいろいろなことを言われますが、それはその人にそういう思いがあるということですので、お互いその価値観を認め合えるような社会にしていきたいなと思います。

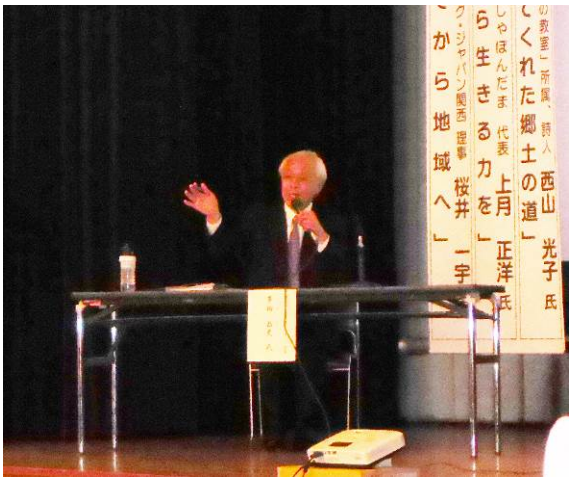
（コ）：ファザーリング・ジャパンに集っているお父さん方の間で何か喧嘩とか言い合いだとかトラブル、そういったものはあるのでしょうか。

（桜）：お互いがこんな生き方もあるのだということで、びっくりするくらい多様性を認め合っています。逆にそのお父さんたちが、各地域で活動するときに、そこではなかなかお互いを認め合いにくいというところがあります。これからのキーワードとしては多様性なのかなと思います。

（上）：課題や壁というのは実はとてもあり過ぎて、何から手をつけていこうかと思うのですが、これはひとつの事例ですが、私たちは昭和 24 年制定の「青年学級振興法」という法律を使ってスタートしました。しかしこの法律がいろいろややこしいので、途中で市の条例になるのですが、そのプロセスの中でこの法令がなくなってしまいました。「拠って立つ寄る辺」がひとつなくなったのですが、実はその当時まだ青年学級というのが５つ残っていました。各青年学級は、地域でお花やお茶をやっているところが多かったのですが、今残っているのがキャンプカウンセリングを行っているところがひとつ、現在はいよやかの郷でキャンプをやっているようですが、そことうちの２つが残りました。そのときに他の学級が、時代の流れでなくなっていくという中で、障害者学級だけは残してあげてくださいと皆さんに言っていただけたということで、存続することができました。とても有難かったなと感じています。市の方も青年学級をなくしてしまおうと思っていたわけではないと思うのですが、そう言っていただけたお陰で今もこの学級が残っている。そういう意味で周りからの支えが本当に有難かったという事例です。今後おこってくるであろう問題なのですが、私も 52 歳なので基本は若い人たちを中心にということで学級をつくってきたので、結構入れ替わりもあるのですが、次にどう伝えていくのかということが一番大きな課題です。今の障害者のメンバー、学級生もだんだん年をとってきているので、ハイキングは難しいのではという議論になるのですが、これは“安全”と“チャレンジする”ということと常に天秤で、ファザリング・ジャパンの桜井さんのお話を聞いても、「危険だからやめておこう」というのもひとつの物差しですし、「なんとかチャレンジしたい」というのも私たちの気概でもあります。この二つの物差しのぶつかり合いになって、安全にやれるよねというふうになっていく。この気持ちやチャレンジ精神を、どこまで次の人たちに伝えていけるのかなということで、研修などもいろいろしますし、私たちも楽しみながら、これは課題だなということを、伝えていこうと考えています。
地域でのつながりの中でチャレンジを続けるということをどう伝えていこうかということが、今の私たちの課題だと思っています。

（西）：私は課題というよりも、先ほどから何度も申してますとおり、たくさんの仲間を増やしたい。それがひとつの課題なのですが、最後にこの場をお借りして、皆さんにエールを贈りたい。自分ひとりでは生きていけないけれども、自分の人生を決めるのは自分しかないのです。二度とない人生ですから、今やっていること、これからやりたいと思うことがあるならば、どうぞ継続して途中でやめないで続けてください。いろいろな障害があろうとも、その後には必ずいいことがあると思います。

そういうことを、どうぞたくさんの方々にお話なさって、豊かな人生を過ごせるように、それが一番の望みであり課題でもあります。
先ほど申し上げなかったのですが、ご紹介しますと、「昼下がりの読書ルーム」というのですが、これは自主学習グループ「若葉」が読書会で35年かかって書いてきたものを集大成いたしまして、やっとひとつの形になりました。続ければこういうこともできます。
それから詩集なのですが、詩なんて個人の営みに過ぎないのですが、皆さんの詩が集まると年一回でもこういうふうに冊子にできる。出来上がるととてもうれしい。ついついもっとたくさんの仲間を呼びたくなる。でも何回か来ると「こんなのは難しいからやめる」とやめていく方も多いのですが、頑張ったらできます。図書館では「子ども読書活動推進計画」というものを企画しまして、これを見ますといろいろなところで頑張っている人たちのことがよくわかります。これは図書館にございます。
それから「あゆみ」といいまして、図書館友の会が10年20年の節目に編集したものですが、消えていった教室もありますが、ここでは短歌、俳句、詩の教室、文章教室あるいは古文書など、ずっと20年30年と続けてきた人の集大成を記録しております。これは宣伝ですが、図書館友の会では、2月12日に図書館で講演会をいたします。
それからコーラスでは、30周年の記念誌を作成されました。歌い続けて30年。とにかくやろうと思ったことは、やめないで続けてください。それが必ず花開くときがあると思います。
とにかく続けてやりましょう、皆さんに頑張ろうとエールを贈りたいと思います。



（コ）：パネルディスカッションの後と、最初の質問で生涯学習というものは楽しいものでないといけないということから、三人の方々にどんなときが一番嬉しいと思いますかと、そんな瞬間をお聞きしました。また、最後の質問で課題は何ですかとお聞きしました。楽しいはずのものに、課題があるのは矛盾しているのではないかと、とられた方もいらっしゃるかもしれません。
何が言いたいかといいますと、元来、生涯学習というものは楽しいものでないといけないのですけれども、しかしそれをやっている間はずっと順風満帆に波風も立たずにやっていっているかというとそうではありません。先ほど、パネリストの方々がおっしゃったように、やっぱり何かしら問題意識、課題意識をもちながら、でもそれは生涯学習をされている方は、きっとそういった問題や課題にぶつかっても、それを克服するためにいろんなことを考えられたり知恵を出されたり、西山さんがきれいにまとめてくださったのですが、継続してやって行く意識、意欲があればやはりどこかで、心が折れそうになっても、

躓(つまづ)くことがあっても、すぐにそれを乗り越えようとする力が、それまでに十分養えるという、そういった性格をもっていますので、課題があることと本来楽しいものでなければならないことと、ぜんぜん矛盾することではありません。ですから、そこは私も皆さん方に生涯学習の勧めを言う場合、楽をしていれば何でもできるというような理解をされるのは少し問題がありますので、途中いろいろなことにぶち当たることがあっても、それを乗り越える力というものが、生涯学習を続けている間、ちゃんと培われていくということですので、全く心配する必要はありません。このように矛盾するような質問をしたのは、そういったことを皆さん方にお話したかったということですので、ご理解のほどよろしくお願いいたします。時間もあまりありませんが、最後これだけは言っておきたいということがありましたら、どうぞお話ください。

（桜）：基調講演で「青少年の体験活動と自立」ということで、子ども時代のことをいろいろ書かれているのですが、思い出は受け継がれるというのがありますが、やはり子ども時代に地域の思い出がたくさんあればあるほど、地域、故郷に愛着がわいて将来も当然グローバルな世の中になってくるとは思うのですが、子どもたちが岸和田を愛して、この岸和田に住もう、あるいは子育てしていこうと思うようになるのかなという気がしました。それから成長を目指してといいましたが、どうしてそういうことを考えていたのかなと思っていたのですが、上月さんがお話されたとおり“役に立つ”ということが成長につながっているのかなと思います。何の役に立ちたいのかなと考えてみると、やはり子どもたちの未来に対して、今残業が多かったり自殺者が増えているという社会の中で、そういった社会を未来の子どもたちには残したくないなと、そのためには父親として何ができるか、そのためにも成長していく必要があるのかなと思います。基調講演のテーマにありました「つながっていく心」ではないですが、つながっていくためには自分自身が成長していく必要があるのかなということを改めて確認させていただきました。

（上）：私たちがやっている活動は、よく余暇活動といわれます。余って暇と書きますが、私は全否定しています。余って暇な時間なんかありません。むしろ彼らがなぜ働きたいと思うのか、人間らしく生きる時間をここでつくるためなのだというふうに私たちは常に思っています。私たちもそうありたい。だから最終的には、生きていてよかった、やってよかったなと思ってもらいたいし、それを見ながら自分たちもそう思いたい。常にチャレンジャーでありたいなと思っています。でも一人ではできませんので、いろいろなインフラがありますし、いろいろな方が頑張って活動されている地域でもありますので、そういうところとどんどんつながってもっと活動の輪を広げていければと思っています。

（西）：久しぶりにこういう高いところへ座らせていただいたのですが、やはりそちらの席（客席）のほうがいいですね。今日これだけのことを申し上げるために、年を越すのが大変でした。だから学ばせていただくということが、どんなに楽しいことか今日はまた一層身に沁みて感じました。いろいろなお話を聞いて私自身勉強をさせていただきました。ありがとうございました。

（コ）：パネリストの皆さん、今日は本当にありがとうございました。特に私のほうから総括的なことというのは特にありません。三人の方が最後に一言言われたことに尽きると思います。それぞれ捕らえ方がさまざまだと思いますが、今日のテーマ「今を活きる生涯学習～気づいたときがスタートライン～」でございますので、今日ご来場の皆さんも、今日のこのつどいを参考にしていただきまして、ぜひ生涯学習の活動にご参加されることを期待しております。つたないコーディネートではございましたけれど、お時間が参りましたのでこれをもちましてパネルディスカッションを終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

―資料編―

平成２５年度
『いきいき市民のつどい』

アンケート集計結果

平成２６年１月

◆　第１部・第２部の参加者人のうち、１２５人からアンケートの提出がありました。

Ｑ１　あなたの性別、年齢

男：４５人　女：８０人　　年代無回答：４人　性別無回答：０人　　合計：１２５人

性別 / 年代	男	女	無回答	合 計
１０歳代	０	０	０	０
２０歳代	１	２	０	３
30 歳代	２	１０	０	１２
40 歳代	１１	１３	０	２４
50 歳代	６	１０	０	１６
60 歳代	９	２７	０	３６
70 歳代	１４	１５	０	２９
80 歳代	１	０	０	１
無回答	１	３	０	４
合 計	４５	８０	０	１２５

Ｑ２　この「つどい」は、平成１０年度に「年輪のつどい」として開催されてから今回で１６回目になりますが、あなたは通算して何回目の参加になりますか？

（１２５人 回答）

Ａ．初めて　４１人　　Ｂ．２回～４回　５３人　　Ｃ．５回以上　３１人

Ｑ３　参加回数が、２回以上の方にお聞きします。
今回、基調講演とパネルディスカッションを組み合わせたシンポジウム形式での開催でしたが、従前の市内の活動団体による発表及び分科会形式と比べ、どうでしたか？

（７１人 回答）

Ａ．よかった　４６人　　Ｂ．ふつう　１９人　　Ｃ．よくなかった　６人
Ｄ．特に何も感じない　０人

（回答なし　６人）

その他の意見（６人）

- どちらが良いかというより、その年度毎に考えればよいのでは（４０代男性）
- 参加者全員が同じ内容を共有できるので良いのでは。以前は全員が話をしなければならなかったので、話が深まらないように思えた（５０代男性）
- ほとんど聞き役で出番（発言の場）がなかった（６０代男性）
- 分科会形式の方が、参加者の目的意識がはっきりする（７０代男性）
- パネリストの紹介はそれなりに有意義だと思うが、生涯学習を行っている人々の要望を汲み取るべきではないか（８０代男性）
- 市の社会教育（生涯学習）と少しズレを感じた（６０代女性）

Ｑ４　基調講演及びパネルディスカッションはどうでしたか？

【基調講演】（１１５人 回答）

Ａ．よかった　７４人　　Ｂ．ふつう　３９人　　Ｃ．よくなかった　２人
Ｄ．特に何も感じない　０人

その他の意見（９人）

- 改めて人とのつながりの大切さを学んだ（３０代男性）
- もう少し基調講演の時間をとってほしかった（５０代男性）
- 内容的に無理やり岸和田市とのつながりを探しているように思えた（６０代男性）
- 基調講演時間が３０分では短すぎる（７０代男性）
- もう少し時間をとってゆっくりと話してほしかった（７０代男性）
- 時間が短いので、もっと深い内容で聞きたいと思った（７０代男性）
- 講座内容は分りやすくよく理解できた（８０代男性）
- もっと聞きたくなるくらいお話が楽しかった（４０代女性）
- 市や地域に役立たないと駄目なのか。学びっぱなしではいけないと否定するのはおかしいと思う（６０代女性）

【パネルディスカッション】（８０人 回答）

Ａ．よかった　５３人　　Ｂ．ふつう　２５人　　Ｃ．よくなかった　２人

Ｄ．特に何も感じない　　０人

その他の意見（１４人）

- しゃぼんだまのボランティアに所属しているが、今まで聞いたことのない事実を知ることができ、またそれを脳に刻み頑張っていきたいと思う（３０代男性）
- いろいろな団体の活動がわかった（４０代男性）
- 時間が長すぎるように感じた。１時間程でよいのでは（５０代男性）
- 上月氏が長年、生涯学習を続けてこられた理由に感心した（６０代男性）
- 何でも前向きに考えなければと思った（６０代男性）
- 舞台の照明が暗かった。客席の明るさと反対にすべき（６０代男性）
- パネルディスカッションの時間が長く感じた（７０代男性）
- パネリストの活動の紹介と宣伝に集中していたように思う（７０代男性）
- 多田所長の司会がよかった（４０代女性）
- 上月氏のお話に興味をもった。もっと詳しく聞きたかった（６０代女性）
- 同年齢の方々の取り組みとして、いろいろな地域で小さなサロンが増やされるように願う。また、たくましい子どもが育てられる社会でありたい（６０代女性）
- ３人のパネリストそれぞれが良かった。素敵なコーディネーターだった（７０代女性）
- “自分がやっている活動は良いことだとみんなが思っている”と強調している。話のみで、今ひとつつっこんでほしかった（７０代女性）
- 里親経験（３～１８歳）があり、学園と卒業後の我々との関係をどのようにするか、上月氏にまたお聞きしたい

Ｑ５　基調講演等、希望されるテーマ等がございましたらご記入ください。

（１３人 回答）

- 生涯スポーツについて（７０代男性）
- 生涯学習入門（どのような活動をしているか）（５０代男性）
- 幸せの価値観（５０代男性）
- 世間で知られている活動家の講演などを拝聴したい（６０代男性）
- 学び続けることの意義（７０代男性）
- サークルに入れない人々のための講演も聞きたい（７０代男性）
- 青少年の野外活動と小中高大学生の進学活動のバランスの問題（７０代男性）
- 市場原理主義によって生じた格差と貧困の現状と対策（８０代男性）
- 岩崎順子氏（和歌山県人権センター講師）の「いのちの講演」をたくさんの岸和田市民に聞いてもらいたい（３０代女性）

・ 地域連携するにはどうやって連帯意識をもってもらえるのか（６０代女性）
・ 大人になれない子どもたち（６０代女性）
・ 高齢化と働き盛りの若い人や小さな子どもとのつながりはあるか（６０代女性）
・ 気軽に学びの場に参加できる気づきや勧誘の効果的な実践と方法について（７０代女性）

Ｑ６　この「つどい」についてのご意見、ご感想があればお書きください。

（４３人 回答）

・ 生涯学習が人と人とのつながりを深めるために様々な影響を与えていると改めて感じた（４０代女性）
・ 少し難しく分かりにくかったが良い機会を与えてもらった（女性）
・ 改めて地域とのつながり、学びあうことの大切さを再確認できた（３０代女性）
・ 人と人とのつながりでもあり助け合いでもあると、このつどいに参加して感じた。阪神淡路大震災のときは中学３年生で、その当時は何も感じなかったが、大人になるにつれ毎年１月 17 日を迎えると悲しい気持ちになり胸が痛む（３０代男性）
・ 人生を考えさせられた（３０代男性）
・ パネルディスカッションはおもしろい。いろいろな視点、角度から市民活動を分析できると思う（４０代男性）
・ 分科会形式も良いと思うので、隔年でいいので開催してほしい（４０代男性）
・ 若い世代の参加者が少ない。コーディネーターとパネリストのディスカッションは短い方が良い。長いと何のためのつどいかわからない（４０代男性）
・ 初めての参加であったが、様々な世代の方が参加されておりとても有意義だった。また参加したいと思う（４０代男性 ほか）
・ 色々な活動があることを再認識した（４０代男性）
・ 市民の手作り感があってよかった（５０代男性）
・ 事例発表など大変勉強になるが協力体制を求めている方には、連絡先など知らせてほしいので窓口を作ってほしい（６０代男性）
・ 「つどい」に参加するたびに新しい知識が生まれる気がして生涯学習をしていると感じる。機会があれば積極的に参加したい（６０代男性）
・ パネリスト、基調講演ともパソコンに頼るのは便利なようで印象が薄い（６０代男性）
・ 椅子の配列が悪い。前に座っている人の頭でスクリーンが見えない。前列、後列の椅子を少しずらして配列することで見やすくなる（７０代男性）
・ いろいろな角度から刺激になる。多田先生の質問等進行が大変良かった（７０代男性）
・ 今日になるまでのプロセスを話されて、自分も努力せねばといけないと感じた。（７０代男性）
・ 生涯学習について担当市職員と市民出席者との話し合いの場を設けることが重要（８０代男性）

・ 生涯学習の勧めを岸和田市として本気で推進していただきたい。結果、岸和田市が住みよい楽しい町づくりにつながるので、その仕事に係わっているのだと思って推進していってほしい（女性）
・ パネリストの３名が方が３種３様で、話を聞いていて楽しかった。西山さんより「継続」の大切さを学びました（２０代女性）
・ 自分の為だけではなく、地域の為にもこれからも生涯学習を続けたいと思った（３０代女性）
・ いろいろな方面で活躍されている方の話がきけてよかったと思う（３０代女性）
・ 講演もいいが、講習会のようなものもいいかもしれない。せっかくの生涯学習会、人との縁を大切に集うほうがいいと思う（３０代女性）
・ 市が取り組んでいることを知りたい（３０代女性）
・ 続けていくことが本当に大切だと思うが、これが難しいことだと思う。無くなってしまった会がいくつかあって本当に残念に思う（４０代女性）
・ 昨年始めて参加したが、すばらしいつどいだと思う（４０代女性　ほか）
・ 生涯学習は人が活々と暮らすことができる社会を創るためのもの。市の役に立つ人間を造るためのものだろうか？パネリストの方々の生き方はすばらしいと思って聞いた（６０代女性）
・ 身近な関心のあることで、とても有意義だった（６０代女性　ほか）
・ 人の為になる喜びが、生きる糧になる。自分の活動に自信が持てた。わずかな人でも協力してくださる方がいるだけでも良い（６０代女性）
・ 積極的に生きることへの意欲を持つことの大切さを感じた（６０代女性）
・ すばらしいコーディネーターと３名のパネリストに大変良いお話を聞かせていただいた。生涯学習に対するいろいろな角度からの体験はとても参考になった（６０代女性）
・ 最近の子どもは外に出て遊ぶことを嫌がる。友達と遊んでも各自話しもせずゲームをしていることが多いので、大人が頑張っても無理があるかと思う（７０代女性）
・ 母子家庭が多いが、最近は父子家庭も増えている。父親の帰りが遅くなる場合、小学３年生位だと淋しさもあると思う。地域で助けてあげられるよう考え、取り組んでほしい（７０代女性）
・ すばらしい人たちのお話しで感激した。子どものことをどれ程愛し育てているかを考えさせられ、勉強になった。３人の子育て中の娘に今日のお話を伝えたいと思う。（７０代女性）
・ 基調講演、パネルディスカッションともに聞き応えがあった。参加者それぞれが時間的制約があるのだろうが１部終了後の休憩時間で帰られる人が多いのが残念であった。また若い世代の参加者がもっと多ければよいのだが。（７０代女性）

Ｑ７　「生涯学習」という言葉にどのような印象をお持ちですか？

（４３人　回答）

・ 言葉が硬い。岸和田オリジナルのワードを考えてみては（４０代男性）
・ 常に向上を目指す！目標を持って前向きに努力していく！など（４０代男性）

・ 地域の人たちとかかわりながら、自らも団体に属して様々なことを学習し、知識や情報をえるもの（女性）
・ 自分をより高めるために、自ら進んで学ぶこと（３０代女性）
・ 少し言葉が硬い気もするが、他に分りやすい言葉があるのかもと考えてしまう（３０代女性）
・ いつでも、誰でも、どこでも、学ぶことができる（４０代女性）
・ 広く多くの人が知って実際に行動していくべきだと思う（４０代女性）
・ 仕事をリタイヤした後、若いときから興味があったが出来なかったことを自分の能力に応じて自由に学ぶ場（６０代女性）
・ 趣味などを活かして地域に貢献できることで、そこに生涯学習の言葉が含まれている気がする（３０代男性）
・ 生きていく楽しみ（４０代男性）
・ 生涯学習から実践への橋渡しができるといいと思う（４０代男性）
・ 死ぬまで勉強、成長！（４０代男性）
・ 普通の生活の中で自分なりの生きがいを探すこと（４０代男性）
・ 勉強というイメージが強かったが、本日話をきいてイメージが払拭された（４０代男性）
・ 退職（リタイヤ）した人たちが、生き方を楽しむ学習（５０代男性）
・ 生きている限り、学ぶことの大切さや場所の提供（５０代男性）
・ 学校教育終了後の、自己研鑽のための勉強（６０代男性）
・ 一生涯学習だと思う（６０代男性　ほか）
・ 死を迎えるまで勉強であると同時に、学んだことを人に教えることも大切（６０代男性）
・ 認知症予防のため。また老いても楽しく過ごすというイメージがある（６０代男性）
・ 言葉の印象が硬い。あまり声高に呼び掛けなくてもやる人はやっている（６０代男性）
・ 生涯を通して打ち込めるもの。特に仕事上、現役を離れたときにより必要になると思う（７０代男性）
・ 自分らしく生きるための学習。仲間とともに生きる喜び（７０代男性）
・ あらゆる分野で自己を磨くこと（７０代男性）
・ 生まれてから死を迎えるまでいかにイキイキと生きるか。そのために時々どのように学び知恵をつけ気付いていくか、それが楽しく生きることになる（女性）
・ 人生の学びの時間（２０代女性）
・ 人と人との出会いとコミュニケーション、信頼性（３０代女性）
・ 「生涯〇〇」という言葉はとてもいい言葉だと思う。何らかの学習をずっと続けたい（４０代女性）
・ 自分を成長させてくれるもの（４０代女性）

・ 一生勉強。一生求め続ける。「学ぶ」ことは「青春」（４０代女性）
・ 「生涯学習」という言葉に興味を引かない。古くさいイメージを感じる。たくさんの人が親しみやすいタイトルにすればどうか（６０代女性）
・ 自分にとって大切で、真剣に考えたい言葉（６０代女性）
・ 生きるために必要なこと（６０代女性）
・ 楽しみながら、自分を成長させ続けてくれるもの（６０代女性）
・ 自分の可能性を試すための学習。自分の生涯の居場所をみつける（６０代女性）
・ 生きて行く限り前向きにより良い情報（学び）を取り入れて生きていく！（６０代女性）
・ 学びたいという意欲が、身近な場で気軽に満たされ、学ぶことによって周囲に働きかけることができ意識が高められる（７０代女性）
・ 学習を通して仲間作りができ、それを地域へ還元しボランティアにもつながる。自分もそのうちの一人として誇らしい（７０代女性）
・ 活動や学びが評価されることやその成果（７０代女性）

Ｑ８　どのような生涯学習活動に取り組んでいますか？（重複回答あり）

Ａ	趣味的なもの	４７人
Ｂ	スポーツ、レクリエ―ション	３２人
Ｃ	家庭生活に役立つもの	１２人
Ｄ	健康	１４人
Ｅ	パソコン、インターネット	１８人
Ｆ	福祉	２３人
Ｇ	環境	９人
Ｈ	ボランティア	４０人
Ｉ	育児、教育	２６人
Ｊ	語学	５人
Ｋ	リサイクル	１人
Ｌ	自然体験、アウトドア	１３人
Ｍ	社会問題	５人
Ｎ	ＰＴＡ	４人
Ｏ	その他	４人

（回答なし　１１人）

その他（２人）
・ コーラスで歌の力を訴える（６０代女性）
・ 自主学習グループ（７０代女性）

Ｑ９　生涯学習をしていて、困ったことがありますか？（重複回答あり）

Ａ	時間のやりくりに苦労する	４８人
Ｂ	費用がかかる	１６人
Ｃ	施設が遠い	１２人
Ｄ	情報が分からない	１１人
Ｅ	施設が使いにくい	１４人
Ｆ	場所がとれない	１１人
Ｇ	利用手続きや講座の申し込みが面倒	７人
Ｈ	仲間がいない	６人
Ｉ	周りの理解がない	４人
Ｊ	きっかけがつかめない	８人
Ｋ	その他	３人

（回答なし　３６人）

その他（５人）

- ボランティア活動におけるリーダーの責任問題（７０代男性）
- 図書館や公民館、自然資料館を利用する際、無料駐車場の設置が不十分（８０代男性）
- パソコンが古くなり使えなくなってきた（４０代女性）
- 仲間の高齢化で活動が縮小されつつある（６０代女性）
- 気軽に相談できるところがない（６０代女性）

Q10　今回のこの「つどい」を何でお知りになりましたか？（重複回答あり）

（回答なし　７人）

Ａ	市の広報（ホームページ）	１５件
Ｂ	情報紙（市の広報以外）	６件
Ｃ	チラシ・ポスター	１０件
Ｄ	知人などの紹介	１７件
Ｅ	所属団体の動員要請	７５件
Ｆ	その他	８件

平成 25 年度

第 16 回　生涯学習＜いきいき市民のつどい＞開催要項

＜開催趣旨＞
　生涯学習に関する活動発表や生涯学習をテーマとした語り合いなどのイベントを開催し、市民の生涯学習に対する関心を高める。また、参加者が生涯学習について考え、ふれあい、交流学習を体験し、新たなネットワークづくりの機会を提供することで、本市の生涯学習活動を一層推進する。

＜全体テーマ：「 いまを活きる生涯学習 ～気づいたときがスタートライン～ 」＞

１　日　時　　平成 26 年１月 25 日（土）午後１時 30 分～4 時 00 分

２　場　所　　市立産業会館（別所町３丁目 13-26）

３　内　容　　第１部　基調講演　　午後１時 30 分～午後 2 時 10 分
　　演　題：「 生きていく力、つながっていく心 」
　　講　師：兵庫県立嬉野台生涯教育センター
　　所長　多田　昌史（ただ　まさし）氏

……　休　憩　　午後 2 時 10 分～2 時 20 分　……

第２部　パネルディスカッション　　午後 2 時 20 分～4 時 00 分
　パネリスト
　　西山　光子 氏（ 岸和田市立図書館「詩の教室」所属　詩人 ）
　　上月　正洋 氏（ 障害者学級しゃぼんだま 代表 ）
　　桜井　一宇 氏（ ファザーリング・ジャパン関西 理事 ）

４　目標参加者数及び申込方法等
　　全　体　　250 人
　　生涯学習推進本部関係団体からの参加　　200 人
　　※ 各団体は参加者名簿を**1 月 15 日（水）**までに事務局へ提出する。
　　一般の参加者　　50 人
　　※ 電話・ＦＡＸ・電子メール又は窓口のいずれかの方法により、申し込む。（住所、氏名、電話番号が必要）
　　なお、保育（１歳半～就学前児童及び障害児先着 15 名）や要約筆記・手話通訳等の希望者はその旨も申し出る。締め切りは**1 月 15 日（水）**。

※ チラシ、ポスターのほか、「広報きしわだ」等で開催案内をする。

5　申込及び　　岸和田市教育委員会　生涯学習部　生涯学習課
　　問 合 先　　岸和田市堺町１－１（市立公民館内）
　　電話　423 - 9615～6　　ＦＡＸ　423 - 3011
　　電子メール　syogaig@city.kishiwada.osaka.jp

6　主　　催　　岸和田市生涯学習推進本部・岸和田市・岸和田市教育委員会

どい」開催前の打ち合わせ風景

司会　推進本部　鳥羽委員

岸和田市生涯学習推進本部は、生涯学習のまちづくりを市民ぐるみで推進するために設けられ、委員は次の各団体から選出されています。

岸和田市生涯学習審議会、岸和田市 PTA 協議会、岸和田市こども会育成連絡協議会、岸和田市文化協会、岸和田市体育協会、岸和田市学級・グループ連絡会、岸和田市社会福祉協議会、岸和田市民生委員児童委員協議会、岸和田障害者・児関係団体連絡協議会、岸和田市人権協会、岸和田女性会議、岸和田市医師会、岸和田商工会議所、岸和田市町会連合会、岸和田市中学校校長会、岸和田市議会、学識経験者、岸和田市、岸和田市教育委員会（順不同）

平成 25 年度　第 16 回　いきいき市民のつどい

■ 参加者　176 名

■ 保　育　保育児：２名
　　保育者：２名

■ 要約筆記　希望者：１名
　　筆記者：２名
※ 希望者が１名のためノートテイク形式

第 16 回　いきいき市民のつどい　記録集

発　　行：岸和田市教育委員会

編　　集：岸和田市教育委員会生涯学習部生涯学習課

所 在 地：〒596－0072
大阪府岸和田市堺町１番１号岸和田市立公民館内
電話０７２－４２３－９６１６

発行年月：平成 26 年 3 月